麗　澤　教　育

第９号
平成15年（2003）４月

特集：外国人から見た麗澤大学
――ここがヘンだよ麗大生!!

『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成７年より毎年１回発行しています。

麗澤教育　第九号　〈目次〉

〈フォト・アルバム①〉　麗澤大学の春

〈特別寄稿〉
人類史における精神革命と現代のコモンモラリティ　……伊東俊太郎……6

〈オピニオン〉
（一）麗澤教育の視点
——グローバリズムと多文化理解　……中山　理……15
（二）麗澤大学のヴィジョン
——国際経済学部開設一〇周年へのプレゼント　……佐藤　政則……22

〈フォト・アルバム②〉　麗澤大学の初冬

〈特集〉　外国人から見た麗澤大学——ここがヘンだよ麗大生!!……29
（データ）麗澤大学に在籍している外国人留学生・教員の人数……30
①ちょっと違いの麗大生……鍾　明融……32
②「麗澤」——この小さな世界……王　麗君……34
③麗大の寮について一言いいたい……金　権泳……36

＜フォト・アルバム③＞　元気印の留学生

④麗澤での私の成長 …… 王　越 …… 40
⑤異文化体験はつらい、けど面白い …… アフメット・ギュルメズ …… 42
⑥麗大での七年間を振り返って …… 李　知炫 …… 44
⑦変な質問しないで下さい …… ジャメイン・ロネル・ゴードン …… 46
⑧麗澤大学での一年の旅 …… ソムルタイ・マーニチャイ …… 48
⑨麗澤大学の寮生活 …… ティン・リュウヴァン …… 50
⑩麗大のキャンパス・寮・授業 …… インガ・コンラート …… 52
⑪日本に帰化した私から見た麗澤大学の三〇年 …… 竹原　茂 …… 54
⑫ドイツ語コミュニケーション授業の実情から …… コルネーリア・マーレット …… 60
⑬麗大生よ、学問を『問・学』にしてみたら …… 趙　家林 …… 64
⑭麗大生の特徴
——オーストラリアの学生と比べて—— …… スコット・デイヴィス …… 68
⑮座談会——学内における「異文化間交流」を深めよう!! …… 74
司会：朴　勇俊
外国人留学生：金　貞淑、シュテファン・ヴァーグナー、郭　強
日本人学生　：稲垣博子、小松益徳、谷岡光世

＜麗澤大学の留学生受け入れ態勢＞

①多様性に富む日本語教育を目指して（日本語教育センター）……松本　哲洋……82

②「麗澤に来てよかった」と思える環境づくりを（国際交流センター）……三潴　正道……84

③留学生の愉快な仲間たち（麗澤国際交流親睦会）……鈴木　絢子……86

（データと写真）留学生に関連する行事と地域交流……88

＜温故知新＞

今は昔の物語――草創期の麗澤教育――……池田　裕……90

＜麗大の今＞

①いのちを見つめて――「道徳科学の授業」欠端クラス断章――……欠端　實……96

②図書館の風景――麗大生の素顔に接して――……濱野　泰裕……98

③女だからできる、女にしかできないこともある!!

――麗陵祭を通じて学んだこと――……中島亜希子……99

……友永由美子……101

④「好きな言葉」の調査……鳴原　亜紀……106

……丸山康則ゼミ一同……110

⑤逃げずに立ち向かえ!!――剣道部の活動を通じて学んだこと――……伊藤　洋平……114

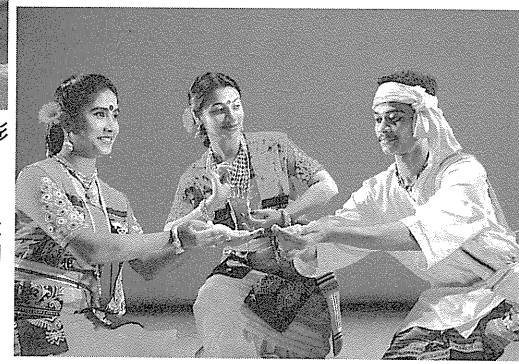
※寄稿して頂いた教員の肩書と在学生の学年は、平成一四年度のものです。

フォト・アルバム ①

麗澤大学の春

平成13年度の卒業式、晴れ姿で記念撮影
(2002. 3. 14)

平成14年度の入学式 (2002. 4. 2)



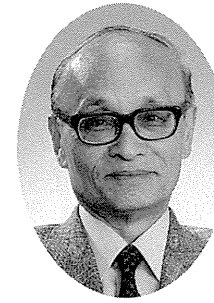
日印国交樹立50周年を記念して行われたインド舞踊劇「チョンダリカ(不可触賤民の娘)」の1シーン
(2002. 5. 1)

恒例の野外昼食会で料理を囲みながら交流する学生たち (2002. 5. 14)

〈特別寄稿〉

人類史における精神革命と現代のコモンモラリティ

麗澤大学教授
比較文明文化研究センター長
伊東　俊太郎



人類史の五大変革期

私はこれまでの人類史を、次の五つの変革期によって区分して把えている。第一は「**人類革命**」(Anthropic Revolution)で、これは五〇〇万～六〇〇万年前に東アフリカで起こった人類の誕生を意味する。直立二足歩行のはじまりによってここに成立した猿人(Australopithecus)は、原人(Homo erectus)、旧人(Homo sapiens)、新人(Homo sapiens sapiens)へ変貌し、世界各地に拡散した。ここに、人類史は始まる。

第二は「**農業革命**」(Agricultural Revolution)で、それまでもっぱら採集・漁撈・狩猟に依存して生活してきた人類が、農耕と牧畜を開始し、食糧の生産確保をはじめ、安定した定住生活に入り、文化を蓄積した。これは紀元前一万年ごろから、根菜農耕を中心とする東南アジア(大陸辺縁部)、麦作を中心とする中近東(パレスチナ、メソポタミア)、稲作を中心とする南中国(長江流域)、雑穀を中心とする西アフリカ、トウモロコシを中心とする核アメリカ(現在のメキシコ・ペルー近辺)の五つの地域に先駆的に起こり、世界各地に伝播した。

第三は「**都市革命**」(Urban Revolution)で、

大規模農耕の進んだ大河の畔りに都市文明が開花する。これはメソポタミアのシュメール（3500 B.C.）、エジプト（3000 B.C.）、長江（3000 B.C.）、インダス（2800 B.C.）、殷（1800 B.C.）、メソアメリカとアンデス（700 B.C.）の七つの地域にまず起こり、周辺に拡がっていった。

第四は、「**精神革命**」（Spiritual Revolution）で、これは今日の講演の主題にほかならない。これはまさに人間の精神の内部の変革を意味し、人間の精神史はここに始まる。「精神革命」は、前八世紀から前四世紀にかけて、ギリシャ、インド、中国、イスラエルの地域に並行して起こった人間精神の内的覚醒をさし、人類史における哲学や高等宗教のはじまりを示している。

すなわちギリシャではタレスにはじまり、ピタゴラス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスと続く優れた哲学者たちを輩出し、インドではウパニシャッドの哲学や六師外道の思想家たち、さらにゴータマ・ブッダにおける仏教の成立ということが起こる。中国では孔子をはじめとして墨子、孟子、荀子、荘子、韓非子などの諸子百家が登場し、特に孔子を中心に儒教の伝統が形成される。イスラエルではアモス、ホセア、イザヤ、エレミア、第二イザヤらの旧約の預言者が出現し、ヤハウェの一神教を説き、やがてその律法を愛に代えたイエス・キリストにうけつがれる。

この「精神革命」の共通の特徴として、ここにはじめて日常的個別的な感覚経験の世界にとどまらず、それぞれ、ある普遍的絶対者を求めて、それによって人間がこの世界で生きてゆくべき共通の原理を樹立した。云いかえれば今日のシンポジウムのテーマとなっている「コモン・モラリティ」を、それぞれ

本稿は、伊東俊太郎教授がモラルサイエンス国際会議（主催：モラロジー研究所、平成一四年八月五日～九日）において発表された講演原稿に、少し手を入れたものです。この原稿は、平成一五年八月ごろに刊行される予定の『コモンモラリティを求めて（仮題）』（モラロジー研究所出版部刊行）に収録され、さらに、英文原稿が英語版の単行本に収録される予定です。

（『麗澤教育』編集委員会）

の文明圏において独自に創り上げたといえる。この今日的意味については、なお後に詳しく論じることとする。

モラルサイエンス国際会議で発表する伊東教授（2002. 8.6）

ついで第五の人類史の変革期は「**科学革命**」(Scientific Revolution)であって、これは一七世紀の西欧においてのみ生起し、その後の世界の知的状況を一変せしめた。すなわちベイコン（F. Bacon)、デカルト（R. Descartes)、ガリレオ（Galileo G.)、ニュートン（I. Newton)らによる近代科学の形成である。この「科学革命」には、続く第二期、第三期があり、第二期は知の技術化を唱えたベイコンの思想を、現実において実現した一八世紀後半の「**産業革命**」(Industrial Revolution）であり、第三期は二〇世紀後半以後の「**情報革命**」(Informational Revolution）である。この三つの変革は連続していて、一つながりのものとして捉えられる。

そして現在はこうした科学技術の進展により、人類は多くの利便を獲得しつつも、同時に人類の全体的破滅をも可能にする環境破壊や核の脅威や資源枯渇などを現出させ、人類はまた「科学革命」以来の大転換期「**環境革命**」(Environmental Revolution)へと突入して今日に到っていると考えられる。

（表一）

「精神革命」の過程の比較

	ギリシア	インド	中国	イスラエル
始源	ホメロス	ヴェーダ	尚書	モーセ五書
多様化	← ソクラテス以前の哲学者たち	← ウパニシャッド・六師外道	← 諸子百家	← 預言者たち
師祖	← ソクラテス	← ゴータマ・ブッダ	← 孔子	← イエス・キリスト
祖述	← プラトン	← マハー・カーシャパ	← 孟子	← パウロ
世界国家	← ヘレニズム王朝（アレクサンドロス大王）	← マウリア王朝（アショカ王）	← 漢帝国（武帝）	← ローマ帝国（テオドシウス帝）

（表二）

「精神革命」の内容の図式的比較

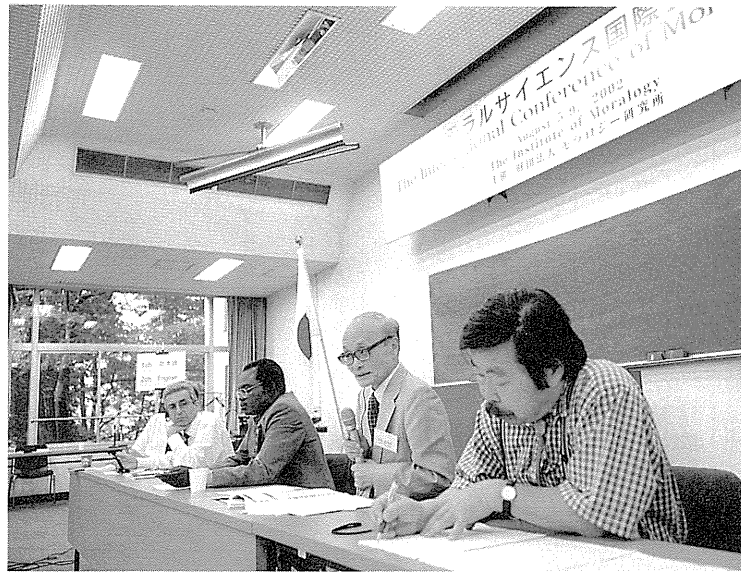
	もとめられた対象	目的	方法
ギリシア	イデア	観照的認識	理論的
インド	涅槃	冥想的解脱	思弁的
中国	道	倫理的実践	直観的
イスラエル	律法	宗教的救済	啓示的

（拙著『文明の誕生』講談社学術文庫より、一部改訂）

精神革命の過程と内容

さて「精神革命」の問題にもどるが、その一々についてここに詳しく述べることはできない。その四つの分脈の過程と内容を比較して図式化しておけば、（表一）や（表二）のようになるであろう。

さらに、イスラエルのユダヤ教に発し、キリスト教に受けつがれた一神教的伝統を受けつぎ、七世紀



モラルサイエンス国際会議で質問に答える伊東教授（2002. 8. 6）

以降イスラム教が出現し発展した。このほか、キリスト教、イスラム教、仏教のような普遍宗教とはならなかったが、それぞれの地域の習俗と深く結びついているヒンドゥー教、道教、神道などの宗教も現存している。

諸宗教がかかえる現代的諸問題

その一、自宗教中心主義

「グローバル時代のコモンモラリティ」という今回の統一テーマに即して云えば、「精神革命」以降に成立した、こうした諸宗教はどのような問題をかかえこんでいるのであろうか。まず第一に、「精神革命」は、さまざまな文明圏において、それぞれ異なった仕方で、それぞれ普遍的絶対者を認め、それとの関係において自己のエゴイズムを克服したものといえるが、今日の宗教の多くのものは、いまだに自宗教中心主義を克服しえておらず、「我が神尊し」の排他的態度をとり続けている。

しかし地球上の諸文明が共存してゆかねばならない今日のグローバル時代においては、自宗教絶対主

義に陥ることなく、他宗教の存在や意義についても認識を拡げなければならない。異なる伝統の諸宗教が互いに学び合う点はあるが、その混合や混融が安易になされるべくもないことは明らかである。それぞれの宗教がそれ自体一つの統一体であるからである。しかし人類の「精神革命」において生じたことは、諸文明圏の背景の違いから、その道のりや方法を異にしながらも、究極霊性（the ultimate spirituality）ともいうべき共通の目標に向かって、さまざまな登山口から頂上への登攀を試みた仲間たちの歩みに譬えられよう。

ソクラテスでは「魂の発見」(discovery of soul)において、ゴータマ・ブッダでは「ニルヴァーナ(nirvāṇa) の自覚」において、また孔子では「道(tao) の認識」において、イエスでは「神の愛」(agapē) において、それぞれある「絶対的普遍者」に達し、そこからギリシャ哲学における「善のイデア」、仏教における「慈悲」、儒教における「仁」、キリストにおける「隣人への愛」が現れ出るという共通の構造が見出される。

各文明圏において見出されたこの「絶対的普遍者」(複数) を「究極霊性」と統括すれば、これは各文明圏において、人間の生き方を価値ある充実した有意義性へと導くものにほかならなかった。それゆえ一は他を異教として排斥するのではなく、人類の道徳的完成という共通の目標に向かって進む僚友として励まし合うのでなくてはならない。「グローバル時代のコモンモラリティ」は、今やこのように、伝統的諸宗教が反目と対立の中にあるのではなく、人類の道徳的完成という共通の目標に向かって、相互に学び、深化し合うものとなることによって、はじめて確立される。

諸宗教がかかえる現代的諸問題
その二、環境問題に対処できるか

第二に、「精神革命」以降に創り出された伝統的宗教は、いずれも今日の環境問題に対処できるようにはなってはいない。それは「精神革命」の時代に

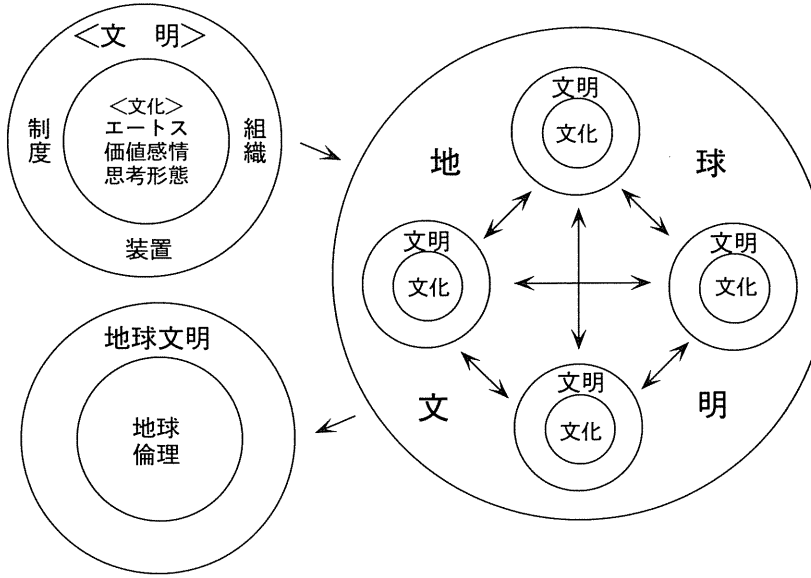
は環境問題は存在しなかったのであるから当然といえば当然であり、そこでは人間の自覚や救済を主眼としており、「地球の存立」というようなことは視野の中にはない。しかし今日の「グローバル時代のコモンモラリティ」は、こうした環境問題を十分に顧慮したものでなければならないことは明らかであり、「環境革命」の時代にあっては、すべての哲学、宗教は「エコ・フィロソフィ」、「エコ・レリジョン」として再編成されなければならない。この場合、仏教における「山川草木悉皆成仏（しっかいじょうぶつ）」の思想や、神道における自然の重視が見直されよう。また経済や政治においても、「エコ・エコノミー」や「エコ・ポリティクス」の視点が重要なものとなろう。

諸宗教がかかえる現代的諸問題
その三、科学倫理を提示できるか

第三に、「科学革命」以降、科学技術は人間の福利を増大させるものとして、それ自身善なるものとして追求されてきたが、今世紀に入り、核兵器の出現や環境破壊の拡大、遺伝子工学の発達など、科学技術の発展が却って人類の全体的壊滅をも可能にする事態が起こりつつある。今日では、科学技術が一体何のためにどのように研究されるべきであるかを追求する「科学倫理」（Ethics of Science）が、逸することのできない新たな課題として登場してきている。生命倫理や情報倫理はその一部と考えられる。これが「グローバル時代のコモンモラリティ」の第三の局面である。

地球倫理としてのコモンモラリティ

今日のグローバル時代においては、現在地球上に存在する諸文明は、左頁の図に示したように、そのうちにそれぞれの固有な文化（エートス、価値感情、思考形態）を内核（the inner core）として含みつつ、外殻（the outer shell）としての文明の制度・組織・装置を共通化させつつ、やがて地球文明というべきものが形成されよう。そこでは文明の共通性



と文化の多様性とが同時に保持される。この文明の共通性を拡げてゆくことによって形成される地球文明の内核に、さらに「地球倫理」と稱されるべきものが新たに形成されねばならない。それがコモンモラリティである。

コモンモラリティのシビリゼイショナル・ミニマム

その際、少なくとも次のシビリゼイショナル・ミニマム(Civilizational Minimum)が守られる必要があると思われる。それは第一に、不殺生(ahiṃsā)、「殺すなかれ」の原則である。これはこれまでの諸宗教がすべて戒律として定めたものであるにもかかわらず、現在少しも守られていない。テロ行為は云うに及ばず、それに対する報復として、文明の名において殺戮が行われていさえする。しかし殺し合うことは、文明の名に値しない。むしろそれは、野蛮そのものである。

第二には、共存(coexistence)・共生(covivence)

3号棟1階会議室でゼミ生とともに（2001.12.23）

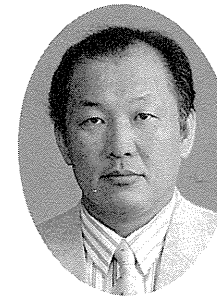
である。一つの文明が他の文明を異質なものとして排除するのではなく、それを許容するということを超えて、むしろ異質なものを、自己を啓発し豊富にするものとして喜び評価すること。しかも今日では文明相互の共存共生のみならず、文明と自然との共存共生が必須なものである。

第三に、公正（equitability）である。文明と文明とが単に共存するというにとどまらず、その間に政治的弾圧、経済的格差、人種的差別等々の不公正があってはならず、それをとり除いてゆく努力を続けねばならない。そのためには、自己のエスノセントリズムを超え出た、他文明に対する真摯な関心を失わない地球的意識（global consciousness）が必要である。二一世紀に必要なこの人類の地球性（globality）の意識は、ある強力な文明の制度や組織を強引に他文明のなかに貫徹しようとする、いわゆる「グローバリゼーション」とは、まったく異なるものであることは云うまでもないであろう。

〈オピニオン〉

麗澤教育の視点
――グローバリズムと多文化理解

外国語学部教授　中山　理



はじめに

私事で恐縮だが、平成一一年に外国語学部将来構想のまとめ役を仰せつかり、その結果を翌年二月二二日、『外国語学部・日本語別科　将来構想計画委員会答申書』として提出した経緯がある（以後、本論で述べる「答申書」とは本答申書を指す）。あれから早くも三年もの月日が流れたわけだが、現代のように物事の変化が激しい時代では、固定的な発想や結論にとらわれず、まさに「流水は腐らず」と言われるごとく、絶えず議論を継続することが大切であろう。

問題の答申書は、入試分析、大学の組織改革、学部改組の提案など、審議内容がすこぶる広範囲に及んだこともあって、その分、外国語学部の教育理念について十分に論議を尽くしたとは言いがたい部分もあった。もちろん、だからといって、この限られた紙面で、大上段に構えた麗澤大学のビジョンなるものを蒸し返すつもりは毛頭ない。ここでは、一教員としての、ごく個人的な私見を、特にグローバル化の側面に焦点を絞り、外国語学部の教育の方向性における問題点について思いつくままに述べてみたいと思う。

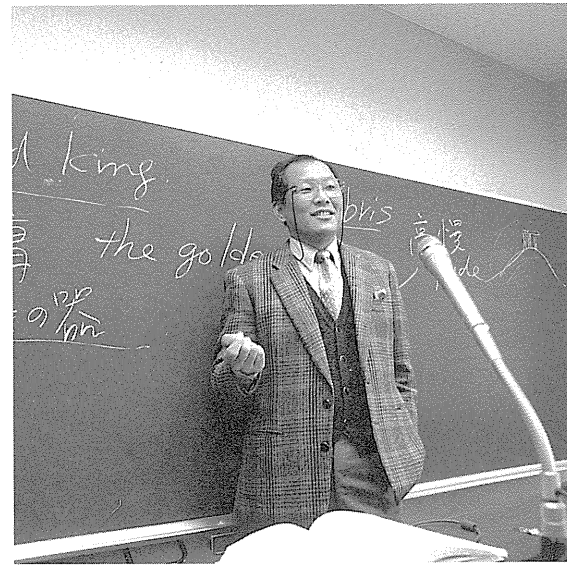
外国語学部における知の再構築

答申書では、予想される学生の学力の多様性を考慮し、大学教育の内容と方法の見直しを前提にして、大学での知の再構築と基礎学問の重要性を指摘した。そして特に、①個性化・多様化（個性に応じた多様なシステム）、②若年層の組織的な教育に加えて生涯教育システム、③国際化と情報化の流れに対応した教育システム、に注目した。この関連で言うと、本論で言及するのは③に関連する部分、特にグローバル化時代における外国語教育の問題である。

さて、麗澤大学外国語学部がめざす教育理念は「語学力を十分に身につけ、国際的に活躍しうる教養があり、道徳的な品性にも優れた人物を育成すること」であり、各学科の専攻分野である言語・文化・歴史などに精通し、国際社会の問題をグローバルな視点から議論できる人材の育成を目指すことにある。しかしながら、ここで掲げた「国際的に活躍しうる教養」や「グローバルな視点」と各専攻分野の言語や文化に関し、両者の間にいかなる関連性や整合性をもたせるのかということについては、教員の間に必ずしも合意が形成されているとは言いがたいのが現状ではなかろうか。

麗澤大学は、自他共生の世界の実現に寄与できる道徳的品性を備えた人材の養成を教育目標に掲げている。このような国際化時代の要請にこたえるために、外国語学部でも、いかに他者理解を教育的課題として受け止めるかを前提としたカリキュラムが構築されている。そのような中で諸外国の言語や文化の受容が、いわゆる外国語学部の「異文化間コミュニケーション」（cross-cultural communication）の思想的な成立基盤を形成しているわけである。

ただし、筆者個人としては、この「異文化」なる概念をそっくりそのまま受容することに対しては、少なからず躊躇感を覚える。というのも、「異文化」という考え方には、欧米中心的な世界に対する周辺的な領域、すなわち欧米が〈標準〉とする枠組みに収まりきらない領域を言及する傾向が少なからず認



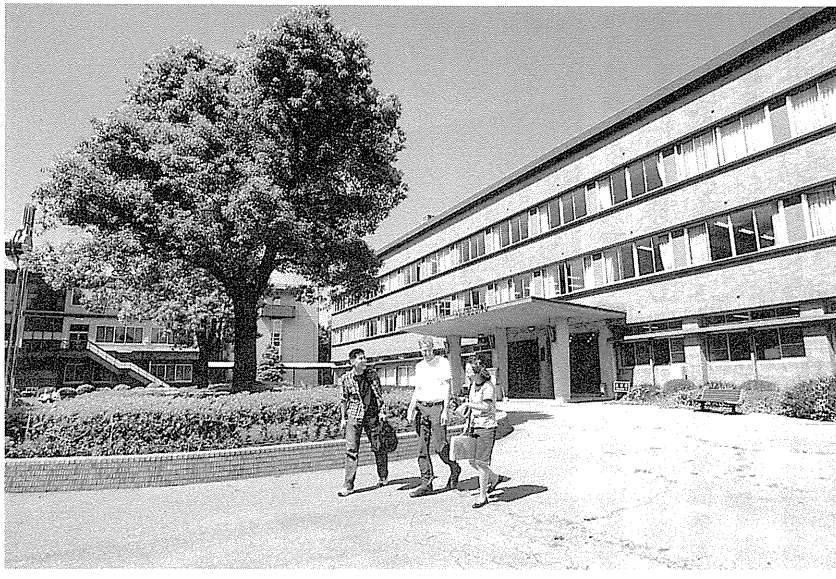
講義をする中山教授

一部の強者の文化に絶対的優位性を認めて、それと異なる文化の意義を「周辺文化」と称して低く評価する、近代の偏った精神性への反動と無関係ではあるまい。もちろん、ポストモダニズムにも、モダニズムと違った意味での偏向性は認められる。モダニズムに欧米中心の近代的文化理解という偏りがあるとしたら、ポストモダニズムにも、もっぱら「周辺」の領域のみに関心を集中させる、という偏りがあるからである。後者では、いわゆる「周辺的文化」が「中心的文化」との必然的な関係を前提としているという事実や、一方の文化だけでは他方の文化が存在し得ないという事実が、いとも簡単に等閑視される傾向がある。現在の一部の偏狭なフェミニズムにも、同じように特徴的な思想的傾向が認められるけれども、自己と他者との相互依存的関係なしには自己の存在根拠もない、という視点が忘れられてはならない。

ともあれ麗澤教育の目的は、多文化理解の理念にもとづき、最終的には多文化の共生をできるかぎり可能にするような世界の構築のために、創立者廣池

められるからである。それぞれの民族や国家固有の文化を公平に尊重するという意味では、むしろ「異文化」よりも「多文化」という言葉を用いた方が適切であると思われる。

やや余談となるかもしれないが、文学研究の世界でも、ポストモダニズムが脱中心化を求めたことは、



校舎２号棟（右）と左奥の校舎３号棟（大学院棟）

千九郎の提唱した「三方よし」の原則に則り、自己と相手と第三者とをともに利する公益的視野――幅広い知識、高度な道徳性、他者への共感性――を備えた人造りを目指すことにあるわけで、外国語学部における国際理解教育も、このようなパラダイムの中で構築されるべきであろう。

グローバルな時代の外国語教育

とはいうものの、このような多文化理解の方向は、グローバリズムに内在する問題との対決をたえず迫られることになる。たとえば、言語を例にとると、現在、地球上で話されている言語は六〇〇〇ほど存在するわけだが、その中で、いわゆる“power”と“discourse”の密接な関係、あるいは国家の経済力と言語の制覇力との相関関係を考えると、マクドナルドに代表される「経済言語」としての英語は、経済のグローバル化を背景にして、少数派の言語よりも圧倒的に優位な立場にある。このことは、インターネット上で使用される言語の約九〇パーセント

が英語であり、全世界の約四分の一の国々が英語を公用語あるいは準公用語として用いている事実を見ても明らかであろう。

このような時代の要請に応えるため、外国語学部では英語学科はもとより他学科でも、英語教育のさらなる充実が叫ばれている。たとえば第二外国語としての英語教育では、カリキュラムや教育システムの改革が望月教授や片桐助教授を中心に開発され、コンピュータを利用したTOEIC自習プログラムの導入など、着々と教育成果があがっている。

その際、問題となるのは、このグローバル化した英語による他言語への一種の圧力のようなもの、あるいは世界共通の「経済言語」としての英語による、他言語の同一化へのベクトルの動きを、どう捉えるかということである。というのも、言語にせよ、文化にせよ、グローバル化を受容するということは、その前提として、言語面での統一という要求にも応じざるを得ないことになるからである。もちろん、経済的グローバル化と、言語的あるいは文化的グローバル化を同一に論ずることは少々乱暴かもしれないが、これからの情報化時代では、英語の共通語化の傾向にますます拍車がかかることは明らかで、それに伴って大学での教育内容やシステムも斬新な改変を要求されることになろう。すなわち、このような言語の一元化によってもたらされる文化的グローバル化をどう考え、それをカリキュラムの中でどう位置づけるのか、という問題が十分に検討されなければならないのである。

具体的に言えば、外国語としての英語教育においても、はたして単なるコミュニケーションの手段としての言語を目的とするだけでよいのか。あるいは言語的グローバル化による文化的変容までも視野に入れつつ、外国語学部各学科の専門領域の再構築という方向まで進むべきなのか。

よきにつけあしきにつけ、もはや共通言語としての英語の市場性や中心性から距離をおくことが困難な状況にあることを考えると、従来のままの外国語教育あるいはカリキュラムのあり方が、さらに検討

を迫られることは確かであろう。その時、麗澤大学外国語学部は、その目指すべき教育理念として、グローバル化と多文化理解教育との間にいかなる整合性を確立するかが問われることになり、またそれが「外国語を学ぶ」日本人学生にとってどのような意味をもつのか、端的に言えば「何のための外国語学部なのか」を明示することが求められるわけである。

英語学科のカリキュラムの方向性

文化的多様性を尊重する筆者としては、他学科の文化的領域にまで干渉することは避け、ここでは筆者の所属する英語学科のカリキュラムの方向性について述べてみたいと思う。グローバル化を迎える時代の国際理解教育における根本課題は、まず異質な他者を理解するための原理を確立することであろう。すなわち、各文化間に存在する差異や各々の固有性を十分に把握し受容できる、知識や精神的能力の養成である。だが前述した英語の場合と同様に、これまでの世界史的現実を見ると、多文化社会を支配してきたものは明らかに西欧中心的な文化であり、中心的な文化が周辺のそれを吸収しつつ、グローバル化を推進してきたと言っても過言ではないだろう。英語学科における英米中心の言語、文化、地域の研究も、ある程度、そのような経済的・文化的ベクトルにそって展開されてきたわけだが、このような伝統的なモデルだけでは西欧中心的パラダイムを越えることは困難である。もちろん、英米の言語・文化研究が必須であることは言うまでもないことであるけれども、さらなる前進を目指すには、そのような欧米文化を学問的に相対化する努力が必要であるし、またそうしなければ、日本と欧米との間における対等な立場での対話も成立しえず、ましてや両者を隔てる障害の壁を乗り越えて新しい道を切り開くことなど不可能であろう。

そのような多文化間の「対話」を成立させるには、文化的差異に加えて、国や民族が保有する文化に共通する要素を抽出して理解させるような教育カリキュラムも必要となる。したがって、これからの英語学

科の国際理解の教育は、英米の言語・文化研究に加えて、たとえば日本の言語・文化的視点からそれを相対化するための知の再構築がなされるべきであろう。そのための基本的なスタンスとして、たとえば国際的なものと日本的なものとを、自己の認識内で適切に棲み分けるような理解力を養成することが大切となる。ただ単にグローバル化や国際化を唱えてみても、日本人としての確固たる自己のアイデンティティーの確立や存在基盤がなくては、世界の政治的・力学的な激流にただ押し流されているだけの流木的存在にすぎない。

それとは反対に、日本的なものを国際的なもののように誤認させるような教育をすると、過激な対外排斥主義や孤立主義的ナショナリズムに陥る危険性がある。たとえば、安全と水がタダなのはあたりまえだと思っている日本の一国平和主義はその典型であろう（もっとも最近は、北朝鮮の日本人拉致事件により、日本外交がいかに擬似平和主義的であったのかが白日のもとにさらされるようになったけれども）。

もちろん、このような現象は日本に限ったことではなく、京都議定書に公然と反旗を翻すアメリカ、中華思想に基づいた強硬的対外政策に終始する中国などにも、同様の傾向が認められよう。狭い国家主義に歪曲されない国際的な公益の追求と、特定の国や企業の利己的欲求を満たすだけの擬似グローバリズムによって各国家の文化の独自性や尊厳性が蹂躙されない原則をいかに構築するか、という問題意識が重要なのである。

したがって多元的共生を目指す世界の構築には、人類が直面する諸問題を共有できる共感力、多文化共生の意味の理解、物事の本質を看破できる能力の涵養が要求されるわけで、そのような理念にたった教育、あるいは知性と人格の形成という課題を担うのが、麗澤大学外国語学部の国際理解教育であろうし、本学の創立者廣池千九郎が学問の究極的目的を人類の安心・平和・幸福の実現に据えたように、それは人類の知的、精神的連帯の上に構築されねばならないのである。

〈オピニオン〉

麗澤大学のヴィジョン
――国際経済学部開設一〇周年へのプレゼント

国際経済学部教授　佐藤政則

国際経済学部は一九九二（平成四）年四月に開設され、二〇〇二（平成一四）年三月で一〇年がすぎた。まだまだこれからであり、一〇周年も通過点にすぎないが、一つの節目ではある。初期の学部運営を微力ながらお手伝いした一人として、この一〇年間を振り返り、これからの学部や大学について雑駁な私見を述べさせて頂こうと思う。

その前に、まず創設に関わられたすべての皆さんに、改めて深く感謝申し上げたい。なかでも教員招聘に尽力された四人の先生方、すなわち初代学部長の小松雅雄名誉教授、情に篤い工藤秀幸教授、いつもシャープな宮川公男教授、学部創設に強烈な熱意を示された永安幸正教授には、この学部の基礎を創って頂いた。この他、国際経済学部の発足とその後の運営には、外国語学部の諸先生方、財団法人・学校法人の本部職員や大学職員の皆さんなど、私の狭い眼から見えただけでも実に多くの方々の直接・間接の協力があった。また私には見えなかった世界も広いと思う。この小さい麗澤大学が懸命に背伸びをして国際経済学部を立ち上がらせたこと、そしてそこにはたくさんの人々の尽力があったこと、これを決して忘れてはならないだろう。

学部開設までには助走期間も含め、かなりの時が費やされた。私の麗澤大学への着任は一九九一（平

成三）年四月であり、その頃は文部省（現文部科学省）への申請の最終段階であった。一年間だけお世話になった外国語学部教授会には、私のような国際経済学部要員が少なからず在籍しており、かなりの大所帯であった。この教員を中心に打合せ会（当時は運営委員会と称した）を定期的に開くようになったのが、九一年の七月からであったと思う。七月の運営委員会では、いきなり学部の運営（つまり教授会決定の執行をどのように行うか）について激しい議論があり、非常にびっくりした。同時に新学部（国際経済学部のことをそう呼んでいた）に賭ける熱い情熱に打たれたものである。

七月下旬には西鋭夫教授とご一緒に都内の高校を訪問し、九月中旬にも一人で愛知県の七つの高校を訪ね、新学部の広報を行ったが、つくづくと無名大学の悲哀を感じた。今でもまだまだだが、その頃の麗澤大学は、いい教育をしているにもかかわらず、規模が小さいためか、本当に世間に知られていなかった。

九月初めには、小松学部長のもとに永安幸正、浦山重郎の両教授が教務主任となり、八代京子助教授（当時）と私が教務副主任という学部執行部も決まった。それからは、筆舌に尽くし難い激しい毎日となった。この状況は、第一期の新入生を無事迎え入れた初年度も、そして二年目に入っても変わらなかった。運営の仕組みを造りながら、次々と発生する新しい問題に対応せねばならず、学部執行部はてんてこ舞の日々であった。

当時、小松学部長は「落ち着くまでには一〇年かかるよ」と、しばしば言われていた。その頃の感覚では一〇年後なんて、あまりに遠い世界であったが、今から見れば「あっ」という間の時間であった。小松先生が言われていたように、たしかに学部も大学も落ち着いたように思う。鈴木幸夫名誉教授、丸山康則教授、成相修教授といった、歴代の学部長や学部執行部、宮川公男教授、河野稠果教授という歴代の大学院研究科長、そしてそれらを支えた多くの教職員の、真面目な姿勢がもたらした成果であろう。

この間、一九九六（平成八）年度には大学院国際経済研究科修士課程が、また九八年度には博士課程も開設された。翌九九年度には、学部に既存の国際経済学科、国際経営学科のほかに、国際産業情報学科が増設された。こうして新たな仲間も次々に増えた。学部カリキュラムの大幅な改革は一九九六年度、一九九九年度、そして今回の二〇〇三年度改革と行われてきた。学部も大学も初期に比べれば、見違えるほどの充実であろう。

しかしながら、私には猛烈な閉塞感があった。大学や学部の将来像や基本的な課題については、国際経済学部が一九九九（平成一一）年三月にまとめた「麗澤大学の将来像」に、すべてまとめられている。要は実行あるのみであったが、大学の動きがあまりにも鈍く、時を逸する焦りが高まっていた。

こうした私個人の焦りや閉塞感を吹き飛ばしてくれたのが、以下で述べる国際経済学部開設一〇周年へのプレゼントである。二〇〇二年一二月になって、それも三つも頂いた。もっとも「プレゼント」というのは、私の勝手な解釈である。

まず第一のプレゼントは学生達から贈られた。一〇周年記念の懸賞論文のことである。二〇〇二（平成一四）年一二月一〇日、国際経済学部開設一〇周年を記念する懸賞論文の応募が締め切られた。前日までの応募は九本。最終日にどこまで伸びるか、期待と不安で結構ドキドキした。在学の学部生と大学院生から論文、エッセイあわせて三四本、それから卒業生のエッセイ五本、合計三九本が最終的な応募であった。二月八日には表彰式が行われた。在学生では一〇本、卒業生では三本の入賞となり、関係教職員が見守る中、成相修学部長・麗澤大学経済学会長から表彰状と賞金が贈られた。いずれの入賞作品も力作ばかりであった。実のところ、三九本も集まるとは思っていなかった。下手をすると一本もないのでは、と思っていた。各々のテーマも多岐にわたっており、予想外の好反響にビックリしている。この陰には、積極的な応募を奨励して下さった諸先生方や、機会ある毎に応募を呼びかけて下さった事

国際経済学部創立10周年記念懸賞論文・エッセイ表彰式のあと、入賞者とゼミ担任の記念撮影。後列右から2番目が佐藤教授　(2003. 2. 8)

務職の皆さんなど、きっと多くの方々の力があったと思っている。

しかし何より、わが学生達、卒業生達を誉めたい。立派なものだ。見直した。よくやった。一〇周年の素晴らしいプレゼントを在学生・卒業生から贈られた、そんな気分である。それと同時に、冷静に応募論文やエッセイのタイトルを眺めると、このプレゼントを貰った国際経済学部の教育責任は重いと考える。そのほとんどが極めて現代的で具体的な問題を扱っており、彼らの大学教育に対するニーズの所在がわかるからである。言うまでもなく大学というのは、吟味された新しい知を提供しなければならない。しかも学生のニーズとあまりに離れていては、意味がないだろう。この懸賞論文を通じて切々と訴えかけてくる学生達に、学部や大学がしっかりと応えていけば、自ずと未来は切り開かれるはずである。道筋が見えれば勇気も闘志も沸く。学生達は大変なプレゼントを贈ってくれたのである。

第二のプレゼントは学校教育法の改正よって贈ら

れた。二〇〇三年四月から施行される同法の改正は、主に学部の設置認可制度の見直し、大学評価制度の導入からなる。私がプレゼントだと思うのは、設置認可制度の見直しである。これによって、授与される学位や収容定員を変更しなければ、届出だけで大学院や学部の改組が可能になった。こうした方向は、これまでの大学審議会答申（例えば平成一一年一月の「これからの大学改革」）に沿うものであり、個性豊かな教育を行う大学ほどビッグチャンスとなろう。国際経済学部や外国語学部が、これまで培ってきた教育内容や教育条件は、自信をもって世間に問うことができるものである。必要な改革を大いに進めたい。

国際経済学部創設（平成４年）と同時に建てられた校舎１号棟

国際経済学部では、機を見るに敏な成相修学部長が、早速、高巖教授を委員長とする「学部の新たな枠組みを考える小委員会」を立ち上げた。国際経済学部教授会でのみ通用する「若手」（世間一般からみれば中年だろう）を集めたこの委員会から、どのような新機軸が打ち出されるか、大変楽しみにしている。大学院や大学全体の改組に関わる議論も起こってくるだろう。

改革を進める上で決して忘れてはならないのが、麗澤は私学だということである。つまり「教えたい

ことがあるから公的教育機関を造った」のであり、社会的要請があるから造ったのではないということである。したがって、われわれの建学の精神や教育理念、新たな知を提供するカリキュラムは、毎年毎年、受験生や在学生そして卒業生達に試されているのである。この意味で私学としての麗澤大学の教育責任は、はるかに重いと言える。真摯で懸命な取り組みを性分とする麗澤大学にとって、学校教育法の改正は、大変なチャンスとなる可能性を与えてくれているのである。

第三番目のプレゼントは、二〇〇二年一二月一九日、全学的意思決定機関である大学院委員会および協議会で、廣池幹堂学長から贈られた。この日、廣池学長は、「これまで学校法人廣池学園理事長と麗澤大学学長を兼任してきたが、任期満了に伴い学長職を辞任し、今後は理事長として大学・高校・中学の学校教育を支えていきたい」との意思を示された。兼任と分離のいずれが適切かは一義的には言えない。ただ麗澤大学が、これからの荒波を乗り切るには、自律を強要することになる分離の方が望ましいと考えていた。しかし同時に、兼任は不動の体制だろうとも思い込んでいた。だから廣池学長の意思表明には、非常にびっくりした。

二〇〇三年度からの麗澤大学は、これまで以上に自己に厳しい運営が要求されるだろう。梅田博之新学長のもとで大学院両研究科、両学部とも、教育・研究におけるなお一層の研鑽が必要になるだろう。これらの地道な努力は、いずれは学生たちに還元されていく。大変、喜ばしいことである。

以上の三つのプレゼントは、実は各々が結びついており、一つの大きな道を示してくれている。その道は、国際経済学部にとってビッグチャンスにもなるだろうが、同時に大変な試練でもあるだろう。しかし国際経済学部は、なかなかタフな生き物である。激動が大好きなスタッフに恵まれている。多くの方々の支援を受けて、きっとチャンスをつかむだろう。まさに次の一〇年に向けたスタートに相応しい、素晴らしいプレゼントである。

フォト・アルバム ②

麗澤大学の初冬

留学情報を提供する「留学フェア」（2002.12.2）

本学の留学生を励ますために始められたキャンパスのクリスマスツリー
（2002.12）

「卒業生との懇談会」で在学生に紹介される卒業生
（2002.12.7）

中国青年代表団と学生が交流（2002.11.16）

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学――ここがヘンだよ麗大生!!

麗澤大学は、学生数約三三〇〇人というこぢんまりした大学ですが、その中に、約五〇〇名の外国人留学生が在籍しています。すなわち、全学生の約一五%、七人に一人が留学生というわけで、これは全国の大学の中でもかなり高い比率です。また、教員の数においても、専任教員約一三〇人の中に、外国人教員が約二〇人（約一五%）含まれており、さらに、非常勤の外国人講師が約三〇人います。

麗澤大学は、日本人学生の海外留学に力を入れていますが、外国に行かなくても、ふだんの柏キャンパスそのものが、国際交流・異文化体験に満ちているのです。

そこで、今回の『麗澤教育』第九号では、麗澤大学にいる外国人（留学生と教員）の声に耳を傾けてみることにしました。異文化の背景を有する彼らや彼女らが、麗澤大学や麗大生について、どのように感じ、考えているか、大いに語っていただこうという企画です。

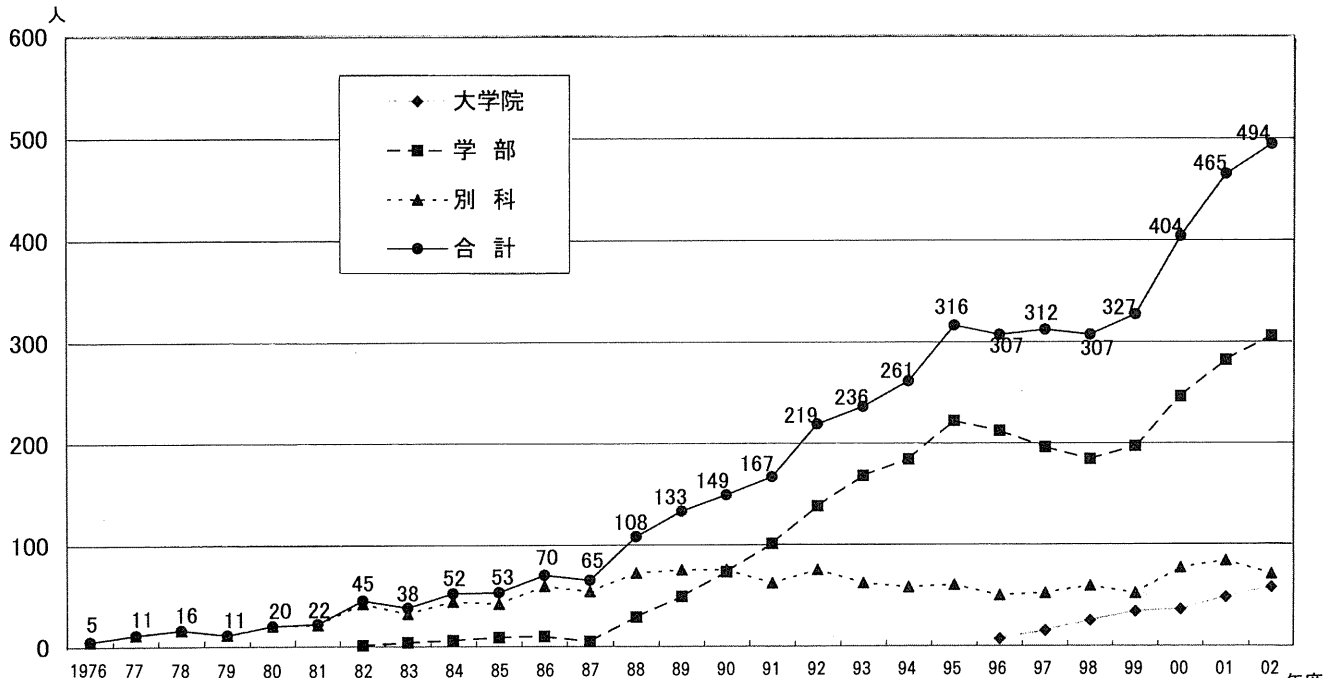
執筆者は、学部教務などからのご推薦にもとづいて、委員会が選ばせていただきました。選ばれた方々には、母国の大学や大学生と比べて、麗澤大学や麗大生の特色はどんなところにあると思うかとか、麗澤大学や麗大生のよいところ、改善すべきところなどについて、存分に書いてくださいと依頼しました。

この特集が、某テレビ局の人気番組「ここがヘンだよ日本人」のように、活気ある討論を巻き起こすことを期待しております。そして、彼らや彼女らの声が、私たち麗澤に学ぶものや麗澤教育にたずさわるものにとって、自らを省みるよい手がかりになることを願ってやみません。

（編集委員会　鈴木康之）

＊寄稿して頂いた教員の肩書と在学生の学年は、平成一四年度のものです。

留学生数の年度別推移



※「留学」目的以外のビザを持つ外国籍の学生を含む。
「合計」の人数の中には、個別の折れ線グラフに表現されていない「聴講生・研究生」の数も含む。

～麗澤大学に在籍している外国人留学生・教員の人数～

（表１）平成14年度　留学生数

（平成14年５月１日現在）

	国　籍	大学院	学　部	別　科	聴　講	合　計
1	中　国	31	163	17	1	212
2	台　湾	13	43	29	30	115
3	韓　国	21	83	11		115
4	タイ	6	2	6		14
5	アメリカ	1	1	1	4	7
6	香　港	2	2	2		6
7	ベトナム	1	5			6
8	マレーシア	1	3			4
9	モンゴル	2		1		3
10	ドイツ				3	3
11	クウェート		2			2
12	スウェーデン			2		2
13	ブータン		1	1		2
14	トルコ	1				1
15	ペルー			1		1
16	カナダ		1			1
	合　計	79	306	71	38	494

※「留学」目的以外のビザを持つ外国籍の学生を含む。大学院は研究生を含む。

（表２）平成14年度　外国人教員数

（平成14年５月１日現在）

	国　籍	教　授	助教授	講　師	非常勤講師	合　計
1	アメリカ	2	1	1	8	12
2	中　国	2	1		8	11
3	イギリス		2	1	3	6
4	ドイツ		1	1	2	4
5	韓　国	1	1		2	4
6	オーストラリア	1	1			2
7	カナダ		1		1	2
8	フランス				2	2
9	マレーシア		1			1
10	タ　イ				1	1
11	台　湾				1	1
12	インド				1	1
13	（日本に帰化）	2			3	5
	合　計	8	9	3	32	52

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ①

ちょっと違いの麗大生

日本語学科三年 鍾（ショウ） 明融（メイユウ）（台湾）

台湾から日本に来て、もう四年経った。最初麗澤大学に来た時、すごく綺麗で大学らしいところだと思った。なぜかというと、都内のほかの大学と比べれば、校舎ばかりではなく、緑の大自然もいっぱいあって、心が開く環境は麗澤の一大特色だと思う。そして、麗澤大学に入って、日本人の学生をはじめ、他の国の留学生と交流して、いい勉強になったと思う。今回、私は麗澤大学で経験したことと、麗大生から感じた台湾とは違うところを書きたいと思う。

外国人から見た日本人の特徴は、自分の意見をはっきり言わないことだとよく言われる。私も実際に、その日本語特有の曖昧な表現で苦しんだ。「また今度ね」とか「結構です」とか、いったいＹＥＳなのかＮＯなのかはっきりしない曖昧な言い方は台湾では使われないから、何回も誤解が生じた。

日本人は「和」を大事にする民族だと思う。人との争いをやめて、仲良くする気持ちで人と付き合うことは素晴らしいことだと思う。しかし、集団の中で自分の意見を言うこと自体が異質に見られることも、日本の不思議の一つだと思う。この特徴は、大学生にもまだ見られる。

例えば、授業中にあまり質問しないし、反応がないことだ。普段学校で話すときは、国のことを聞いたり自分の感想を言ったりするのに、授業になると、妙に

研究室で戸田ゼミのメンバーと一緒に（後列左端が鍾さん）

静かになってしまう。先生からの質問に、日本の学生なら知っているはずなのに、あまり答えたりしない。大学教育は高校の教育とは違うのだから、先生の言うことを素直に聞けばよいのではなく、もっと自分の意見を表したり、他人と意見を交わしたりすべきだと思う。

学校以外の過ごし方も、日本と台湾は少し違う。どちらかというと、日本の大学生はアルバイトするのが多いようだ。家の援助を受けず自分の力で生活する麗大生が結構いる。日本の大学生は台湾の大学生より自立しているように感じている。しかし、授業の時刻よりもバイトの時刻を気にしていることなど、お金を最優先に考えている人もいるようだ。いくら現代が、物質中心社会だとしても、金銭にばかり気を向けているということは、悲しいことだ。

そして、学生にとって、「勉強」と「遊び」も健全な人格の陶冶に不可欠なことだと思う。ここで言った「遊び」は、お互いに誘い合い旅行などして、学生の間で交流することだ。台湾の大学は、日本ほど学校行事やイベントは多くないが、学生の間での交流はすごく頻繁でよく遊んでいる。しかし、麗大生を見ていると、いつも少人数のグループだけで集まって、それ以外の人とは学校以外の時もあまり連絡しないようだ。やはり、お互いに知り合うことが大事で、人間関係を築いたり、自己表現力もそこからできるのではないかと思う。

今まで、経験した日本の文化、社会現象などは、自分の国と違うところが結構あったが、それは変だなと思ったことは一度もない。異文化と接触するとき、一番大事なのは、排斥しないことと理解しようとすることだと思う。これからも日本の学生と触れ合うことを通して、日本のことをいろいろ学びたいと思う。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ②

「麗澤」―― この小さな世界

日本語学科四年 王（オウ） 麗（レイ） 君（クン）（中国）

わたしがこの大学に入学してから四年目を迎え、毎日楽しく充実した生活を送っています。

この大学に入って一番感じたことは、麗澤はまさに小さな世界だということです。ここにいるだけで、いろいろな国に留学しているような気がしています。麗澤大学には、日本人をはじめ、アメリカ、ドイツ、マレーシア、韓国、中国など、世界の一六の国・地域から来た学生がいます。留学生ばかりでなく、各国から来た教員が大学の敷地内に居住していて、国際色豊かなキャンパスだと感じました。

麗澤大学の目指すものは「真の国際人の育成」にあります。これはいろいろな方面で具体化されており、他大学よりも、いろいろな国の学生とコミュニケーションをより密に取れると言われています。他の大学に行っている友人に聞いたところ、授業が終わると学生は皆個々に帰ってしまうのですが、麗澤では授業の後も、留学生と日本人が一対一で勉強したり、三々五々談笑したり、友達ができやすい環境にあります。

授業に関していえば、入学前は、日本語学科には日本人の学生はいないと思っており、日本人と接する機会が少ないだろうと考えていました。しかし、実際に授業を受けてみると、自分の想像とは違って、留学生のみのクラスもあれば、日本人と一緒に受けるクラスもあります。このように、日本人をはじめ、世界各国

戸田ゼミの懇親会。前列右から2番目が王さん（2002. 7. 22）

から来ている留学生とコミュニケーションを取ることで、交流の幅も広がり、日本以外の国の実情を知ることができます。

逆に、日本人や多くの留学生達に、自分の国のことを知ってもらうこともできます。自分の国を理解してもらうためには、まず自分の方から心を開いていかなければなりません。そして、同じように相手の言うことにもしっかり耳を傾けることが肝要になります。そうしているうちに、他の国の理解を深め、全く違った文化を学ぶこともでき、視野が広がりました。

このように麗澤大学の日本語学科は、日本語という一部分を捉えた勉強をするのではなく、全体的な視点で見ていくことが目標となっていると感じています。

「麗澤」――この小さな世界で学んだ多くのことを生かして、広い世界に羽ばたいて行きたいと思います。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ③

麗大の寮について一言いいたい

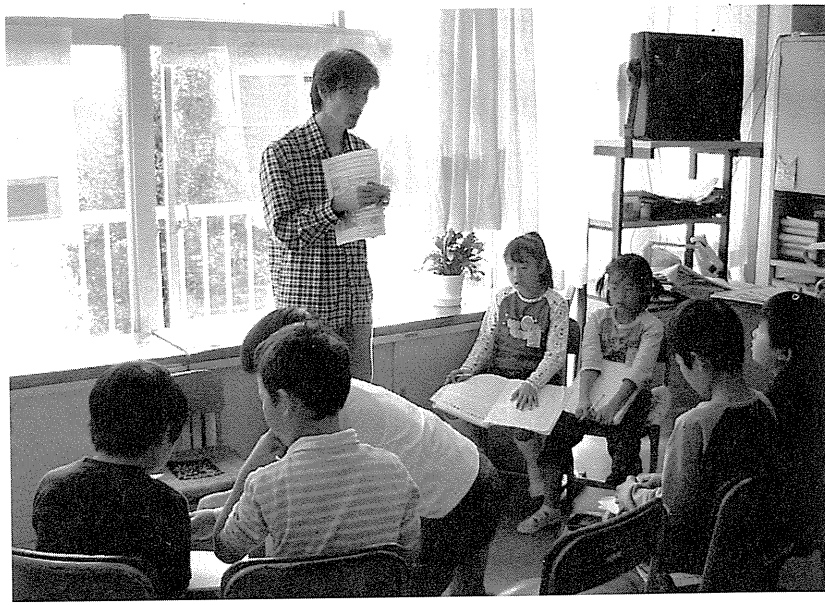
国際産業情報学科四年 金（キム） 権（ゴン） 泳（ヨン）（韓国）

初めまして、私は麗澤大学国際経済学部国際産業情報学科四年の金　権泳です。これが出版される頃には、私はもう麗澤を卒業していると思います。

留学生の目に映る麗澤の学生について書いてほしいと依頼を受けましたが、私は麗澤大学の寮について述べたいと思います。

現在（二〇〇二年一〇月）麗澤の寮は国際寮として、国内、海外に紹介されています。実際に生活をしている外国人留学生は韓国を始め、中国、台湾、アメリカ、スウェーデン、トルコ、ドイツ、タイ、ブータンなど、様々な国から来ています。耳を澄ませば外国語を聞くチャンスもいっぱいあります。

寮の大きな特徴は、生活の中でも気をつけてみると、ちょっとした異文化体験ができることです。日本人では想像もつかない外国の習慣と考え方など、少なくとも旅行で行かないと絶対体験できないことが、毎日簡単に体験できます。そういう意味ではとても面白いところです。ある国では頭が禿げている人が人気者らしく、男の人はみんな禿げになりたがります。脱毛剤が高くてお金持ちの息子でない限り入手することはとても難しいらしいです。「日本では、発毛剤があるのが理解できません」といいながら、「日本で発毛剤のアルバイトをすると、そこそこの金がはいって来るから、よかった」というのを耳にして、笑いが止まらなかっ



国際交流学習の一環で、児童に韓国文化などを紹介する金さん（柏市立第五小学校で）

たことがありました。しかし、殆どの学生はその貴重な体験を見過ごしているのではないでしょうか…。

麗澤大学の寮について述べている間に、大学の寮というのは何を目的として作られているのか書きたくなりました。大学に寮があるのは、地方の学生や海外の留学生を受け入れるためで、経済的に負担を少なくし、勉強に集中させて優秀な人材を作る為にあると書きたいところですが、実際のところはいかがなものでしょうか？

日本の大学の寮は男女共学でも、男子寮と女子寮に分かれています。良いことだとは思いますが、どうしても理解が行かない部分があります。必ず男女を分けなければいけない理由と、その発想の元です。その理由は、無分別な男女交際を防ぐため、教育上よくないから、学生はまだ十分な判断力がないからなど…だと思います。

しかし、それは確実に間違いだと思います。大人の矛盾した考え方こそが大学生を混乱させ、曖昧模糊とした考えの大学生を生んでいるのだろうと思います。

認めてあげる部分はしっかり認めてあげて、自分の行動についての責任は自分で負わなければいけないことを教えることが、大学ならではの本当の教育ではないかと思います。今は理由も説明しないままで、寮生達は納得がいかないのに、男女交流が固く禁じられています。それがルールだから、ルールを守らない人は退寮させると脅かしているのは、大人がする教育ではないと思います。

寮を国際的交流の場・社交の場として考えると、今のままの寮であれば、折角、日本人学生と海外の留学生が友達になっても、寮生だからという理由で交流の機会を失うことも少なくはないだろうと思います。外国の学生に自分の国の食文化を紹介しようとしても、その相手が異性であれば、自分の所（寮）には呼べなくなり、交流が薄くなるのではないでしょうか！　外は寒いですし、友達同士で食事を作って食べれば、金銭的にも節約になると思います。学生にお金がないのは、昔からよくあることだと思います。

異性と一緒にいるのがよくないことだからという理由であれば、一人暮らしの異性の家に行くことに対しては、なぜ干渉が入らないのですか？　寮には学生がたくさんいるので、心配するようなことは、かえって起こりにくいと思います。

私の目には麗澤大学学生寮のシステムが、学生には男子・女子の区別があるのに、管理人または掃除の人に男女の区別がないのが不思議で仕方ないです。異性の人が入ることで、学生寮はもっと綺麗になると思います。あくまでも、寮を開放して欲しいと言うのではなく、男子学生と女子学生が交流する場所があるべきだと思って書いているのです。

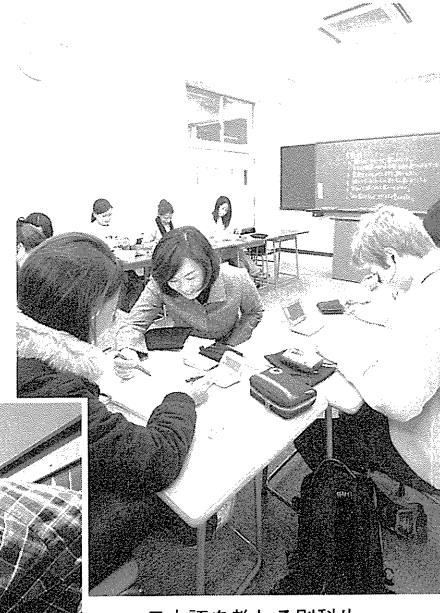
麗澤の寮で生活を終えて出て行く海外の学生の目に、麗澤大学の学寮や学寮課は果たしてどのように映っているのでしょうか！　このような文書を書いても、大学の寮のシステムは変わらないと思います。そこが、海外留学生の目に変に見えるところではないでしょうか！

フォト・アルバム ③

元気印の留学生

麗澤大学の正門で

休み時間に交流する留学生たち



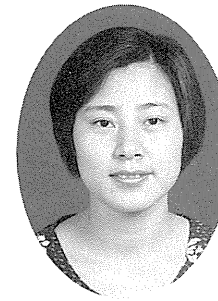
日本語を教わる別科生

わーっ　大きい！

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ④

麗澤での私の成長

国際経営学科三年　王（オウ）　越（エツ）（中国）

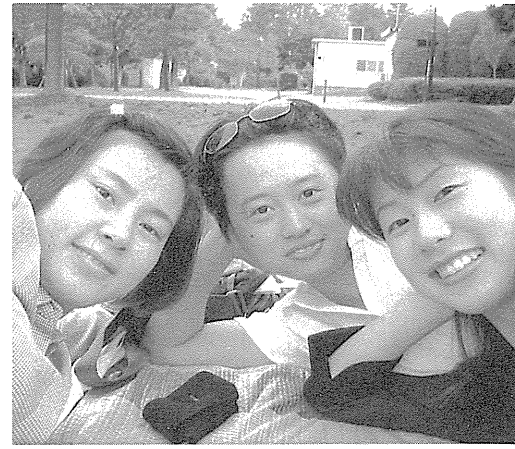


麗澤大学の総合案内のパンフレットには「麗澤」という言葉の語義についてこういうふうに書いてあります。「麗澤」という語は、中国の古典『易経』の「象曰。麗澤兌。君子以朋友講習」という言葉からとったものだそうです。立派な人間になろうとする者は、すぐれた師のもとで、志を同じくする友と切磋琢磨し、人格の完成を目指すと同時に、周囲の人々にもすばらしい影響を与えてゆくよう努力すべきです。私は、大学に入った頃、この言葉をただ何となく目にするだけでしたが、三年間たった今、この言葉の意味を隅々までよく理解できます。

この大学で、学んだ専門知識以外に、私にとってもうひとつの宝物は仲間三人グループです。麗大には、約五〇〇名の外国人留学生がいますが、その中で、わたしたち三人のようなグループは唯一だと思います。グループは「日本人」と「日本人と中国人の親をもつ人」と「中国人の私」の三人です。私たちは自分の将来の夢を話したり、日本と中国の事を話したりして、日本文化の理解を深め、とても楽しい三年間を過ごしてきました。日本でしか、そして麗澤でしか出会えなかったこの仲間は、私の一生の宝物です。

経営学科の高先生は「この大学生活は人生において一度しかない、やり直しはきかない」と話しました。でも、私には二回のチャンスがありました。中国の大

学と日本の大学を比べて、「大学」の概念が変わってきました。同じところは、本学学長の言葉でいうと「大学は、単に知識を学ぶ場ではなく、お互いに切磋琢磨することで人間性、道徳性を高め、人生観・歴史観・世界観を確立する場です」。違うところは、麗澤大学では知徳一体の教育理念に基づいて「真の国際人を養成する」ことをめざしているというところです。



キャンパスの中央広場で
友人とスナップ写真。左が王さん

「国際人」という言葉は、三年前の私にはとても遠い言葉でしたが、今は麗澤でこういう人間を育成するのは、学校の建学の精神だと理解しています。私にとっては、人生観、世界観上の大きな変化です。自国の文化・伝統・歴史を深く理解する上に、さまざまな民族文化・宗教が交錯するこの地球で共に生きていくためには、共感性をもって異文化を理解するとともに、自分の意見、立場をしっかり主張できる人間にならねばなりません。このことが自分の人生目標になりました。

二一世紀は、IT革命時代です。さまざまな情報があふれるこの社会の中には、単に学生たちに、競争の激しい社会での生き方を教えるだけの大学が増えてきて、麗澤のような道徳科学に基づいた知徳一体の教育理念を持つ大学は、かなり少ないのではないでしょうか。そして、私は中国の大学も教育方針が変わってほしいと思っています。これからの時代の大学生は、ただ自分の将来の出世のためにだけ頑張るのではなく、国際社会や人類の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物になるのが望ましいと思います。

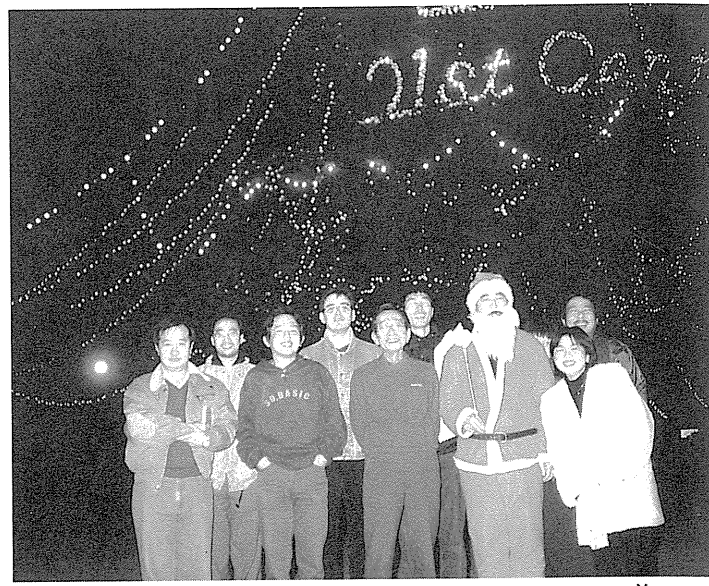
〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑤

異文化体験はつらい、けど面白い

言語教育研究科日本語教育学専攻（博士前期）二年
アフメット・ギュルメズ（トルコ）

ヨーロッパ、アジアやアメリカといった同じ大陸の人でも、持っている文化的・宗教的背景がそれぞれ違います。私は、それらの中で二つの大陸に及ぶ、アジアにもヨーロッパにも領土を持っている、トルコという国からやって来ました。目的は、トルコで勉強した日本語に関する知識を、その本来の環境である日本社会の中で、また、その母語話者である日本人とコミュニケーションを取りながら、もっと深めることでした。しかし、たとえ私が、日本語ではなく日本の技術を身につける目的で来日していたとしても、日本社会の中で暮らしているため、日本の文化や日本語に触れないで帰国することはありえないでしょう。前者と後者の違いは、文化交流が意識的に行われているか、無意識的に行われているかという点にしかありません。結局、いずれの場合も同じ経験をすることに変わりはありません。

例えば、全ての留学生が「日本語、お上手ですね！」と何回も言われたことがあるでしょう。私も、何百回も言われた覚えがあります。初めて言われた時、とても喜び、日本語の母語話者に自分の日本語力を認めてもらった嬉しさで、「もっと頑張ろう」と決心しました。ところが、それから一カ月後、同じ人にもう一度会った時、「日本語上手くなってきたね」と言われたのは全ての終わりでした。「じゃ、一カ月前にほめ



2000年のクリスマスパーティーの時、キャンパスのツリーの前で大学院生とともに（後列左から２番目がギュルメズさん）

られたのは何だったんだろう」と悩んでいたら、「社交辞令」という言葉を学びました。

一つ学びましたが、逆にカルチャーショックのせいで失ったものは計りしれないほど大きかったです。馬鹿にされているのかと思い、本当にほめられているのか、それとも、また社交辞令なのか、区別できなくなりました。日本では「社交辞令」だと認識されているものは、トルコでは「嘘、馬鹿にしている」と認識される場合もあるので、こうした経験は、私の多くの日本人との関係に大きな影響を与えたかもしれません。

同じようなことは、意識的あるいは無意識的に、留学生同士でも起こることがよくあります。ところが、どんな社会から来た人間であっても、文化と宗教以外に、個性といった、誰にでも認めてもらいたい大切なものを持っているという事実を忘れてはいけません。より良い人間関係を築くには、相手を日本人だトルコ人だと考えるより、アフメットさん、山田さんという個人として考えることが大切だという意味です。そうすればカルチャーショックも少なくなるでしょう。最終的に言いたいことは「異文化体験はつらい、けど面白い！」それは、私が麗澤大学での三年間の留学生活を通して学んだことです。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑥

麗大での七年間を振り返って

国際経済研究科政策管理専攻二年 李(イ) 知(チ) 炫(ヒョン)（韓国）

「外国人留学生からみた麗澤大学」というテーマで執筆依頼を受けた時は悩みましたが、これを機会にいままでの自分の留学生活を振り返ってみたいと思います。

おそらく、自分は研究室にいる同期の院生の中で麗大生活が最も長い一人だろうと思います。今から七年前に、本大学の国際経済学部に入学し、学部課程を終え、その後再び本学大学院の国際経済研究科に足を踏み入れ、現在修士二年になります。しかし、今年が麗澤大学での最後の年になるだろうかと思うと、とても寂しい気持ちでいっぱいです。

留学生ならだれでも感じることでしょうが、私も最初は言葉の壁の前で苦しみ、その上さらに私と日本人学生とのあまりにも大きい実力差で悩み、毎日が自分との戦いの日々でした。そして、あっという間に七年という時が過ぎた今、いろいろな困難を乗り越えて、大学院まで進んだ私は、初めて勉強や研究の楽しさを味わうことができるようになりました。

私がここまで来られたのは、私をいつも温かい目で見守ってくださった、たくさんの方々からの支えや応援があったからだと思います。大学院の研究では、その分野で最も権威のある先生の指導を受け、生活においても奨学金のおかげであまり大きな心配もなく、日本の生活を楽しむことができました。また、その生活の中で出会えたさまざまな分野の先生方、日本人学生、

柏市内の中華レストランに集まった河野稠果教授と院生（左から２番目が李さん）

そしていろいろな国からの留学生には、多くのことを学ばせていただきました。私にとってこのような人々との交流は、最も大きな収穫であったと言っても過言ではありません。

それから、もうひとつ学んだことは、ものを長い目で見ることです。今後何年間も研究をしていく研究者として、すぐ目の前のことより、長い目でものを見ることがいかに大事であるかを、しみじみ感じています。

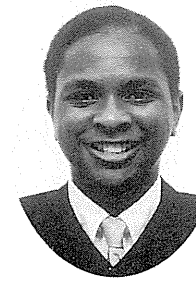
ここまで、自分が思ったことを勝手に書かせて頂きました。これからも色々な苦しみや悩みがあると思いますが、それらに負けずに〝やればできる〟と〝努力はいつか報われる〟という言葉を信じ、これからも前に進んでいきたいと思います。

最後に貴重な経験を得ることができ、こうした機会を与えてくださった先生方や大学関係の皆様に、心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました！

〈特集〉外国人から見た麗澤大学――ここがヘンだよ麗大生!! ⑦

変な質問しないで下さい

別科日本語研修課程
ジャメイン・ロネル・ゴードン（アメリカ）



私は四年以上日本に住んでいるので、カルチャーショックはあまりありません。だから、「日本では何にびっくりしますか」と日本人に聞かれたら、私の答えは、「何もびっくりしません」です。しかし、日本の生活にはだんだん慣れたのに、まだ一つ問題があります。時々、日本人は、私に「お箸を使えないでしょう」とか「やっぱり、日本の冬は寒い（暑い）ですね」とか「日本語は難しいですね」という質問をします。あと「ご飯を食べられますか」、「アメリカは雪が降りますか」、「やっぱり、納豆が嫌いでしょう」という質問もあります。どうして皆はいつも同じ変な質問をするのでしょうか。

多分、日本人は「だれも日本のことなんて知 りません、小さい国だから」と思っているのでしょう。しかし、そうではなく、実際、日本は世界で二番目の経済大国ですから、世界で日本のことは有名です。アメリカやいろいろな国は、日本でビジネスがしたいので、日本のことを勉強して、日本に来て仕事する外国人は多いのです。

そして、日本の漫画とアニメは、世界でだんだん人気がでてきました。例えば、「ポケモン」、「ドラゴンボール」、「セーラームーン」なども、オタクによく知られています。（私もアメリカン・アニメ・オタクでした）こう見れば、私達がたくさん日本の文化などを学んでいることが分かるでしょう。

夏休みに本学の学生と（前列右がゴードンさん）

あと、他の国ではいろいろな日本の武道をする人がたくさんいます。空手、柔道、合気道などをしながら、日本の文化や習慣を勉強しています。

そうして、最近ますます日本文化に興味をもった人は、日本に来たくなるようです。そういう人たちは、日本料理を食べたことがあるし、日本文化と日本語を少し勉強したこともあるし、お箸だって使える場合が多いのです。だから、最初に例をあげたような変な質問は見当ちがいなのです。私達留学生も人間ですから、普通の会話がしたいのです。私達は観光客ではなく、本当の日本を体験したいのです。日本人と友達になりたいので、もっと大人っぽい話をして下さい。

もちろん、アメリカや他のたくさんの国にも、ご飯があるし雪もあるし、暑いところも寒いところもあります。そして、アメリカにはいろいろな国の人が来ますので、いろいろ違う国の料理があり、納豆も買うことができます。

今まで、私は三つの国の三つの大学で学んだことがあります。米国のオークランド大学を卒業しましたが、フランスのオルレアン大学にも留学したことがあるし、今は麗澤大学に留学しています。もちろん、その三つの国の中では、文化、料理、毎日の生活は違いますが、基本はだいたい同じです。麗澤大学には幸運な事に、いい留学生と日本人学生がたくさんいるので、国際関係はだんだん良くなるでしょう。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑧

麗澤大学での一年の旅

別科日本語研修課程
ソムルタイ・マーニチャイ（タイ）

私は、ソムルタイ・マーニチャイです。タイのバンコクから来ました。麗澤大学に日本語を学びに来たのは、以前から日本に興味を抱いており、タイで開かれた留学フェアで、本学の留学生に対する日本語教育が充実していることを知ったからです。

日本に来る前は、期待で胸がいっぱいでした。しかし、日本に来たばかりのころ、家族や知人がいない寂しさや異国に対する戸惑いで、毎晩泣いていました。従姉妹のご主人の弟と一緒に出かけた時、街中や電車の中で耳にする日本語はまったく理解できませんでした。周囲の日本人を見ると、タイとは違い表情一つなく、冷たい民族だと思いました。しかし、時が過ぎるにつれて、日本に対する消極的な思いがだんだん薄れてきました。麗澤大学の日本人学生を見た時、初めは真面目でちょっと話しづらいかなと思いましたが、話しているうちに、それは表面だけで、実際は明るくて親しみやすいということが分かりました。今では、寮の中では、頼りになる寮長さんや同じ寮の友人に支えられて、大学生活を楽しく送れるようになりました。

別科の授業では、たくさんの国々からの留学生と互いに刺激しあいながら、日本語を勉強しています。麗澤大学は、特に漢字圏からの留学生が多く、彼らに囲まれながら勉強をしているので、たくさんの漢字に触れ、学ぶことができます。また教室で勉強するだけで

本学の留学生同士で懇親会
（右から２番目がマーニチャイさん）

なく、日本の有名な場所に連れて行ってもらったりして、貴重な経験を得ることができました。

親切な日本人の支えもあり、少しずつですが日本語や日本の文化を理解するようになりました。日本人に対する思いは一八〇度変わりました。日本人は本当に親切だと思います。しかし、謙虚で内気な面もあり、外からは冷たい人間に見えてしまい、日本人の本当の姿が分かるには時間がかかると思います。でも、これは日本人にとって、もったいないことです。麗澤大学の日本人の学生も、もっと最初からオープンな態度で接したら、もっといいのではないでしょうか。

一方、麗澤大学には、自国の大学と違うスタイルの寮祭や大学祭などの活発なアクティビティーがあり、私たち留学生もこのようなイベントに参加することで、日本人といろいろな交流ができて、とてもいいです。また、私の日本人の友達は、自分の将来のため、生活のため、したいことのために、アルバイトをしています。タイの大学生は、ほとんどアルバイトをしません。私は、勉強と両立させながら、自分の責任のもとにアルバイトをしている日本人の学生は素晴らしいと思います。

いざ国を出ると本当にたくさんの困難に遭遇します。しかし、その分自分は強くなったと思います。日本の生活の中で、自国では決して得ることのできない貴重な経験を得ることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ日本で学ぶことはたくさんありますが、この学んだことが自分の将来につながると信じています。どんな困難に遭遇しても決して屈することなく、日本の生活をエンジョイしたいと思います。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑨

麗澤大学の寮生活

日本語学科三年　ティン・リュウヴァン（ベトナム）

ベトナムから来たティン・リュウヴァンと言います。現在（平成一四年）、外国語学部日本語学科三年生です。最近、寮に入るための誓約書やレポートを書き、三年前に日本に来たときのことを思い出しました。

雨が降った日の夜中に成田空港に到着しました。直接麗澤大学の寮に行ったら遅くなり、誰にも対応してもらえないと思って、柏のホテルに泊まりました。次の朝、麗澤大学の寮に到着したら、親切な職員の川上さんが待っていてくれました。手続きをして入寮しました。

あっという間に三年間経ちました。この間の日本での生活では、いろいろなことが起こりました。はじめて日本での生活を送った私にとって、大変でしたが、とても有意義で楽しい経験でした。

麗澤大学の寮にはいろんな国の人が集まっています。ヨーロッパのドイツ人、アメリカ人や、中東のトルコ人などから、アジアの中国人、韓国人、マレーシア人やブータン人まで、もちろん日本人もいます。寮で生活をすることにより、日本語の勉強や日本の文化、習慣などが少し理解できるようになり、他の国々の文化、習慣なども知るようになってきたのです。

例を挙げると次のようなことです。

まず、日本人もお風呂に入る習慣をもっています。しかし私は最初にお風呂に入ったときに、なぜ椅子が

置いてあるのか不思議に思いました。私たちベトナム人やトルコ人などは、お風呂では椅子を使いません。日本人は椅子に座り、体を洗うのは、少し変わった習慣です。そして、お風呂も小さくて、最初は入りにくかったです（でも今はもう慣れてきました）。

次に日本人の友達の部屋ではベッドを使わず、床（ゆか）の上で寝るのにびっくりしました。寮の各部屋にはベッドが設置されていますが、日本人はそのベッドを室外に出して、床で寝ています。ほかの国の人（ベトナム人である私、中国人、トルコ人、モンゴル人など）はベッドを使っています。

軽井沢へテニス部の懇親旅行
（後列左から２番目が
リュウヴァンさん）

しかし、最近、寮に住んでいる何人かの影響で、麗澤大学の寮では異変が起こり、他の人に大変迷惑をかけました。それは先ほど述べたように、ある意味で麗澤大学の寮は国際的な交流の場所でありますが、それを利用して友達を連れてきて、勉強せずに夜中まで遊んで大騒ぎをして、他の寮生に迷惑をかけました。他には異性を入れたり、規則を守っていなかったりする人がいました。前には月に二回、異性が寮に入ることができましたが、今はできなくなりました。

そんなことがあっても麗澤大学の寮は本当に国際的で、そこに住んでいる皆さんがお互いに勉強の面や生活の面などで努力しながら、楽しい生活を送っています。皆さんも私と同じように、寮に入りたい理由は、経済的に安く、便利で、安全なので希望するかもしれませんが、そのほかにもっとも大事なのは、日本人および他の国の人との出会い、世界を小さくするように皆がひとつになることでしょう。

麗澤大学の寮に入ると皆の笑顔で迎えられ、有意義で楽しい生活が送れます。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑩

麗大のキャンパス・寮・授業

外国語学部特別聴講生　インガ・コンラート（ドイツ）

私はドイツのアイセンベルグと言う町の出身で、今二三歳、ドイツのイェーナ大学で経済学部の三年生である。留学生として日本へ来て、今、他の国の人と共に別科の授業を受けている。日本とドイツの生活はもちろん違うので、その異なるところについて書きたいと思う。まずは大学の比較。一五五八年に建てられたイェーナ大学は何世紀もへて、学部と研究所が少しずつ増えてきた。それ故に大学の建物は町中のどこにでもある。柏市はイェーナより大きいけれど、イェーナ大学で勉強している学生の人数は一万六千人ぐらいなので、麗澤大学より大きい大学である。このごろイェーナの通りを歩いていると、大学生も大学の建物もたくさん見られるので、イェーナは大学都市のように感じられる。

それに対して麗澤大学は本物のキャンパス大学である。大学生の人数が少ないし、すべての人々が優しくしてくれるし、ミドリが多くて綺麗だし、それに春になると桜が天国のように咲いている。こういう訳で、ここに着いた時、すぐによい気分になった。皆が大学にいるというよりも、大きな家族のような気持ちがする。授業であれ、部活や寮であれ、こういう感じを受けた。

今、麗澤大学の学生寮で日本人やいろいろな国の人と共に住むのは楽しくて、すでに多くの本当に大切な経験をした。日本とドイツの大学を比較すると、いろいろなことが違うのに、寮の生活は大体同じである。

友人とともに埼玉県戸田市での花火大会へ（後列右から2番目がコンラートさん）

だから早く寮の習慣に慣れることができて、特別な問題もなかったと思う。自分の部屋はちょっと狭くても、学校から近くて、便利である。寮に住んでいる人は優しいし、国際的な雰囲気があるし、そうしていつもいろいろな面白いことを聞いてくる。掃除などしなければならないこともあるけれど、あまり疲れるほどではないし、いろいろなことが自由にできるので、寮の生活はそんなに厳しくないと思う。西洋人の目から見れば、おかしい点が一つある。女子学生と男子学生は同じ寮に住むことができないどころか、立ち寄ることもできない。その規則の理由について説明してもらった時、その狙いは分かったけれど、とても残念な気持ちであった。ドイツでは毎日のことを一緒にするのが普通である。例えば、一緒に宿題をやったり、テレビを見たり、料理をしたり、それに平々凡々なコミュニケーションをしたり。しかしそれをしたい時、学生食堂の「ひいらぎ」以外の場所はない。特に日曜日は不便である。麗澤大学の建物の中で学生寮しか開いていない。残念だが、今はここに留学しているので、麗澤の規則を守るべきであると思う。

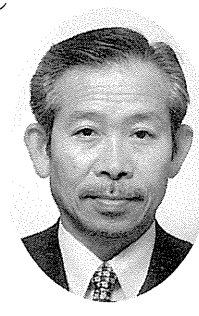
最後は授業に関すること。別科の授業を受けると、どういう訳だか、高校生の時を思い出す。その時と同じなのは、クラスの人数が少なくて、いつも一緒に勉強していることである。さらに、テストも宿題もたくさんあり、自分で決めることは少ない。他方では、このような授業の時、いつも先生にいろいろと手伝ってもらえるので、安心できて嬉しい。

つまり、イェーナ大学と麗澤大学は違っていて、両方にいい面と悪い面がある。私は日本へ留学に来られたので、今、日本語や日本の文化に関して学習ができて、名所を見物できる機会がある。それは皆さんのおかげなので、とても嬉しく、有難く思っている。

〈特集〉外国人から見た麗澤大学――ここがヘンだよ麗大生!! ⑪

日本に帰化した私から見た麗澤大学の三〇年

外国語学部教授　竹原　茂（ラオス名（ウドム・ラタナヴォン））



一、麗澤大学のむかし

麗澤大学にお世話になってもう三一年になる。実は、一九六七年一一月に廣池千太郎学長（当時）にご縁があった。当時、私は一橋大学経済学部三年生（発展途上国の経済開発専攻）。ラオス国民の生活向上のために養蚕技術指導の協定を麗澤大学と結ぶために来日されたカムバイ氏（当時ラオス商工会議長）と廣池千太郎学長との対談を通訳するのがきっかけであった。

一橋大学を卒業して一年後つまり一九七一年に、麗澤海外開発協会の嘱託としてお世話になった。そのかたわら現在の麗澤大学二号棟二階の小さな科学実験室で、井田孝先生（現名誉教授）と同室させていただいた。麗澤大学には、その時、全寮制の寮と、図書館（現大学院棟）と、大学本館（現二号棟）しかなかった。

大学の正面玄関から眺めると並木があって、広々とした芝生のグランドがある。休日には市民の活動（ボーイ・スカウトや青年団、家族連れの若夫婦や年配の方々）で賑わい、なんとも開放的で素晴らしい大学だなと感じた。今は、小学校・幼稚園などで殺人事件が起きたりするので、廣池学園も警備員をおかなければならない時代になった。

全寮制なので学生数も少なく、教員と学生は、教室だけではなく、教員の家庭や外のレストランなどでもよく交流したと思う。大学祭には前夜祭と後夜祭があった。後夜祭には、確かに「ご苦労様」という意味で、学生委員会、教員とその家族とが共にキャンプファイヤーを現在の研究室B棟の場所でおこない、豚汁とおにぎりで親睦会が行われた記憶がある。学生達と楽しいひとときを過ごした。

三〇年前の麗大生は「よく学び、よく遊ぶ」学生だった。自分が教わった教員に挨拶するだけでなく、他の教職員、一般の来客にまで、きちんと挨拶ができた。教室で学ぶ姿勢も正しく、真剣に先生の話を聞いてノートにメモをとっていた。なぜなら、当時はビデオ・パソコン・インターネット・携帯電話など一切なかった時代である。使えるのはカセット・プレーヤーのみであった。

もうひとつ忘れられないのは、全校筑波山バス旅行（当時は「遠歩き」といった）に二度参加したことである。筑波山の麓までバスで行き、そこから筑波山の山頂までは、学生も教員も歩いた。汗を流した後のお弁当とお茶が、なんとおいしかっただろう！　今の麗大生の人数から考えると、全校バス旅行など到底考えられないだろう。むかしの麗大には学生と先生の間に密接な交流があったため、卒業式には学生達の眼に涙が溢れていた。私もつい学生の前で自然に涙が流れた。本当に懐かしく、一生忘れられない、麗大の古き良き時代だった。

二、豊かな時代の代償

私は一九八三年一〇月に日本に帰化した。その頃インドシナ諸国（ラオス、カンボジア、ベトナム）が共産化し、自由・平和・民主主義を愛するものは、ほとんど亡命した。在日インドシナ出身者（留学生、研究生、一般人）は、すべて政治難民、流民となった。私も例外ではなかった。大学教員の道を進むのにその国の国籍を取った方がいいと思い、帰化を選んだ。なぜなら、妻は日本人であり、子供四人も日本で教育を受

けさせたいと思ったからである。しかし、帰化を決心するまでには八年間の時間が必要だった。

当時、タイ王国では、インドシナ三国の難民が国境の町に溢れていた。タイ政府の統計によると、一九七五年から一九八五年に、約五〇万人という多くの難民が、メコン河をタイ側に渡った。村々には多くの難民キャンプができた。

その頃、私はモラロジー研究所青少年担当の方々に、タイに亡命をしている「インドシナ難民を救援しましょう」と呼びかけた。そして、「モラロジー国際救援運動推進委員会」(Moralogy International Relief Committee, M.I.R.C.)が発足した。我が麗大の学生も積極的にMIRCを通じて九名も、タイまで行って、インドシナ難民のためにボランティア活動をしてきた。学生の中には三カ月、六カ月、一年間も休学してタイへ行ってきた者がいる。

その他「アジア連帯委員会(C.S.A. 竹原茂常任理事・発起人)」、「難民を助ける会」(AAR 竹原も発起人メンバー)主催の「じゃがいもの会」(森進一代表)のチャリティコンサートにも、ほとんど毎年、ボランティアの学生を派遣してきた。このような活動は、私が一昨年病気で入院するまで続いてきたが、今は一時活動停止中である。それに今の学生は楽しいボランティアしか興味がなく、苦労を伴うボランティアはあまりしたがらないようだ。

「麗澤教育」を考える場合は、特に便利で豊かな社会の時代に学問を教えるだけでは、若者達は物足りないと感じるであろう。なぜなら、今の時代は、日本国全体がどこでも、いつでもインターネット、ホームページ、携帯電話で勉強できる。語学の勉強をするにも電子辞典やパソコンでする。情報を知りたければ、インターネットのホームページを調べればすぐ分かるし、本や新聞を読まなくても、だいたいの事なら分かる。

しかし、人間はそんなに急いでどこへ行きたいのか、私には分からない。このような勉強の仕方では、若者達は、自分の進みたい道の方向が掴ずに、さまようばかりではないか。便利な時代になって、皮肉にも人間の体も頭も退化してきたようだ。毎日情報があふれる

ほど目に入るが、自分に必要なのはわずかである。

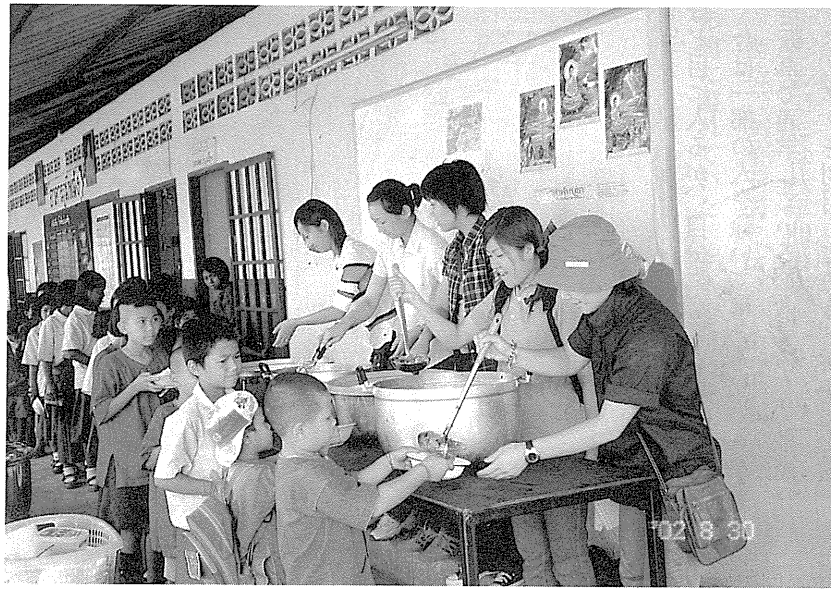
今は一部の人を除いてほとんどの人が車やバイク、自転車で通学している。大学の中で教室へ行くにもエレベーターを利用している。手や足を動かしてある程度の不便をし、体や頭に良い刺激を与えた方がよく勉強ができると言われる。しかし、今のたいていの豊かな社会人は、不便を避けて、便利な方を選ぶと思われる。階段があっても、ほんの二～三階までででも、エレベーターを利用する人がよく見られる。今の時代は機械文明時代なので、一部の人間だけが研究し、便利な道具を発明して、多くの他の人間に使ってもらうのは素晴らしいことである。しかし、現代の文明病によって、世界の先進諸国の人々の大部分の人間性、道徳性が低下したと感じる。その反面、発展途上諸国の人々は、貧困（旧大国の植民地政策とエゴによる）に悩まされながらも、地球環境をちゃんと守っている（贅沢な生活をせず、自然な生活を）。

竹原茂教授宅で、ゼミ生とラオス・タイ料理を楽しむ

三、学生は大学時代にいかに学生生活を過ごすか

① 学問と知恵を追求すること。

② たくさんの友達を作ることと、スポーツをすること（人間関係）。



チェンライ県のバン・パースート小学校で少数民族の生徒たちに昼食をプレゼントした。（彼らには、年に１～２度しかないごちそうです）

③　先生によく尋ねること。

④　ほどほどにアルバイトをすること（それは自分のレジャーのためではなく、社会生活の経験のため）。

⑤　他人（同国民や外国人、身体障害者、貧困者、難民など）の痛みを理解し、利他愛精神を身につけること。

⑥　自分のふるさと（日本）をよく知り、国際理解・国際協力の問題を知り、学生なりの力の範囲内で勉強し行動すること。

⑦　自分の家族（祖父母、両親、兄弟、姉妹、親戚…）を大切にすること。

右に述べた七つの中で、私の管轄で言えば、⑤と⑥について、今の日本の学生にもっと勉強してもらいたい。

廣池学園・麗澤大学には「プアン（Phuan）サークル」と「R.I.F.A.」（Reitaku International Friendship Association）と「難民を考える会（顧問・竹原茂）」などがあり、さらに同じキャンパス内に、「麗澤海外開発協会」（現在、ネパール、バングラデシュ、

タイ北部チェンライ県のＮＧＯに支援している）と「MIRC(Moralogy International Relief Committee)というＮＧＯがあって、難民問題、貧困問題について取り組み、支援活動をしている。

「プアン（Phuan）（顧問・竹原茂）」とは、タイ語・ラオス語では、仲間、友達という意味で、プアン・サークルは、北部タイの少数民族やタイの貧しい人々（特に子供達）に支援をしているタイと日本のＮＧＯ「メーコック・ファーム・プロジェクト・ジャパン」（M.F.P.J. 会長・竹原茂）を理解し、大学祭やフリーマーケットでタイ料理やタイの民芸品などを販売し、協力しているサークルである。毎週一回、現地の状況や途上国の貧困について勉強会をしている。

麗大のキャンパス内にこんな素晴らしいサークルやＮＧＯがあるのに、案外、学生は知らない。四年間の大学生活は短いので、私が述べた⑤と⑥について、真剣に考えて、国際社会時代にふさわしい学生になってもらいたい。そして抽象的で曖昧な情報や知識だけを追求するだけでなく、世界の現実的な問題、自分自身を守る知識や知恵を身につけ、自分の将来のために考えるべきだ。

今年（二〇〇二年）の大学祭で、私のゼミの学生は「世界の子供達について」の展示を、室内飲食部門にはタイ料理を出した。そしてエンターテイメント部門には小生の三人娘が二〇年前の麗大卒業生二人と、「OUDALY BAND」としてライブ演奏で参加した。来年は、屋台や室内飲食やフリーマーケット、各言語の劇や日本の文化と並んで、学生はもっと展示部門（専門コースゼミで勉強したこと）を増やしてもらいたいと思う。

私は一九六五年より日本でさまざまな出来事に満ちた人生を送ってきたが、困った時に日本人に助けてもらったり、今も大いに日本（特に麗澤大学）にお世話になっている。その恩返しをするために、できるだけ国際理解、国際協力ができる学生を育てて、世界に送り出すことが私の精一杯の務めだと思っている。学生諸君は遠慮なく、どしどし研究室Ｂ棟五一五号室にお茶を飲みに来てください。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑫

ドイツ語コミュニケーション授業の実情から

外国語学部講師　コルネーリア・マーレット

麗澤大学とイェーナ大学(ドイツ)との交換教員プログラムの一環として麗澤大学に赴任して二年になります。日本の大学のカリキュラムや履修課程の組織とは根本的に異なる社会で教育を受けてきた多くの外国人教員と同じような問題を抱えながら、効果的な外国語授業を模索しています。ここでは私の個人的なドイツ語コミュニケーション授業の経験から、授業における具体的な問題点とその対策の一部を紹介しましょう。

外国人教員にとっておそらく一番骨が折れるのは、一年生の一学期でしょう。中学・高校で身に付いた学習法との関連で、自分の意見を発言する勇気や大きな声で話すこと、そして辞書を使わずにテキストの大意をつかむことなどが非常に難しいようです。

よく目にするのは、これも多分小中高校教育に関連する問題でしょうが、学生たちに自国の文化に関する知識が不足していることです。よく「日本ではそれは少し違う」と学生たちが言うのですが、それが実際何を意味しているのか、正確な説明を受けたことはありません。「どこどこの文化では、あまり礼儀正しくない／勤勉ではない／ストレートすぎる」といった否定的な発言を耳にしますが、これでは日本人学生が外国へ行ったとき、場合によっては自民族中心主義的だと受けとられ、誤った印象を与えかねません。日本の文化について言及はするものの、それを十分に説明でき

る学生は極めてまれだといえます。たとえば「ここ日本では、新年に神社や寺へお参りに行く」と学生が言います。ただ、なぜそうするのかということは、説明できないことが多いのです。それに加えてさまざまなデータに関する知識も曖昧です。たとえば、この国で二番目・三番目に大きい都市はどれかとか、東京から札幌までの距離は、といった質問に答えることができる学生は、ほんの一部でしかないのが実態です。

学部全般に言えることとして自分の講義で気づいたことは、学生たちが他の文化を描写する際に、いわゆる典型的なステレオタイプの描写を用いていることです。たとえば「イギリス人は…である」「アメリカでは…である」というような。旅行ガイドブックにでてくるような「(この国では…を)しなさい／してはいけない」式の情報ではなく、将来は、学生たちが自分の文化を正しく紹介し(私の国日本では…である、なぜなら…)、他の文化をより深く理解する力(なるほど、それだからドイツ人はこう行動するのか!)を養うような、説明的描写の訓練を導入する必要性を強く感じます。

私の授業では、「他の文化においては、ものの見方が異なることがある」という感覚を鍛えるため、たとえば典型的な日常生活の一コマ(スーパーでの買い物、パーティーへ行く時の待ち合わせ、チケットの注文、丁寧に断る、など)を取り上げ、役割を割り振って演じさせたり、対話練習をさせたりしています。地域文化的なテーマはかなり早い段階から会話の授業に取り入れることができます。その手がかりとなるテーマについては、インターネットを参考にしたり、あるいは自分でクリスマスやイースターについて簡単なテキストを作成することもあります。

留学から戻ってきた学生の報告書の中でも、しばしばドイツ人あるいは他の外国人との会話の中で自国の文化について話す際の無力感が報告されています。それは日本(たとえば出身県など)に関する一般的な質問から、特殊な質問(たとえば歴史に関連して)にまで至ります。これらの報告書を読み、私は留学前の二年生の授業で、通常の教科書にあるテーマと並んで、

「日本」というテーマを取り上げることにしました。学生たちはグループごとに日本や出身県の情報、そして日本特有のテーマ（たとえば「相撲って何？」「七夕って？」）に取り組みました。地域文化に関する説明文、写真、絵を組み合わせたコラージュづくりは、多くの学生が楽しんで取りくめます。グループ作業によるダイナミックスの作用で、とりわけストレスを抱えた外国人教員が嘆くような、授業中の居眠りは極端に少なくなります。（ちなみに居眠りは、欧州出身の教員には、文化的背景から、ぶしつけで非常に失礼な行為と受け取られます）

もう一点、日本での外国語学習において、個人的に非常に厄介な問題だと思うのは、カタカナです。歴史的に、ローマ字の知られていない時代に成立した、外国語のカタカナ表記は理解はできますが、私から見れば今日では、むしろ害になっているように思えてなりません。学生はその単語がどの言語から入ってきたのか知らないだけでなく、音節ごとに変換したカタカナを発音するため、ネイティブスピーカーに全く理解されません。それに加えて、外国語のことばが、ときには聞こえたとおりに、ときにはまた一文字ずつ（あるいは一音節ずつ）変換されるということがあるので、余計にわかりにくくなります。

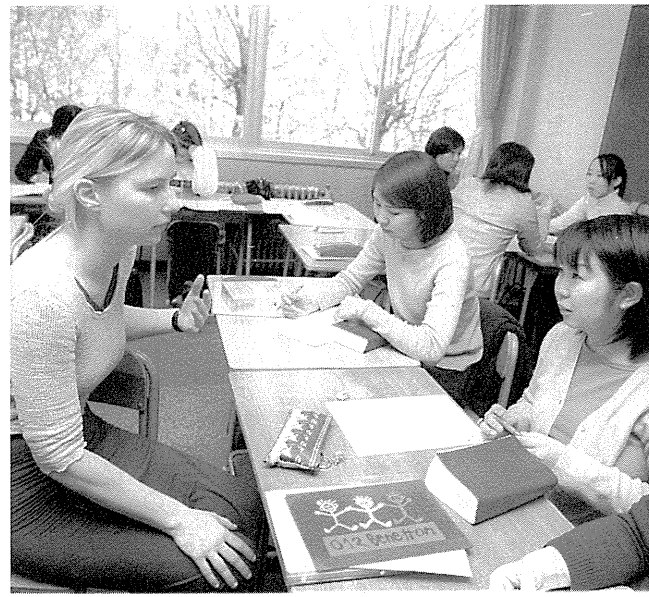
たとえばドイツ語のArbeitは「アルバイト」と発音されます。アルバイトは日本語として定着している言葉なので、カタカナ読みをしやすいのでしょうが、残念ながらこのままではドイツ人に理解されません。それよりも音韻的に近い変換「アーバイッテ」の方がわかりやすいでしょう。

同様に、ある特定の音が表現できないため、ことがより複雑になる場合もあります。たとえば「ゲーテ」。これを聞いて、かの文豪Goethe（グェーテ）であると気づくドイツ人はいないでしょう。

カタカナの単語を再びローマ字で表記しようとすれば、必然的に様々な形が生まれます。外国語の音声を適切に表現できるのは発音記号のみなのですから、一年生の一学期にこれを教えることを検討すべきではないかと思われます。これはドイツ語のみならず、麗澤

で教えられているすべての外国語にあてはまるでしょう。長期的にみれば、これは外国語（英語）が初めて導入される中学・高校で行われても良いかもしれません。

最後に、もうひとつの大きな問題として、授業クラスの規模を挙げたいと思います。ビギナーのクラスでは、特に第二外国語の場合、たとえ学生が強い意欲を持ち、教員が情熱をもって授業に臨んだとしても、現況のような二〇名以上のクラスでは、良い授業、特に活気に満ちた会話の授業を行うのは不可能です。対話は学生が二人ずつ組になって練習できたとしても、教員による十分なチェックが難しいですし、学生たちが発言する機会も限られてしまいます。聴解の訓練も大きなグループでは騒音が多くなり、集中できなくなってしまいます。私の体験からいいますと、コミュニケーション授業のクラス規模は八〜二〇人ぐらいが適当だと思います。コミュニケーションの授業は、その名の示すとおり、生き生きとした会話で成り立つものです。これからも日本の伝統的な教授法を踏まえた上で、学生と教員双方が納得できるような方法を「試し」、それを土台とした協調的な授業形態を模索していきたいと思います。



授業での指導風景

（『麗澤大学論叢』一四号用の原稿より抜粋編集、翻訳・草本晶、要約・黒須里美）

〈特集〉外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑬

麗大生よ、学問を『問・学』にしてみたら

国際経済学部助教授 趙家林（チョウカリン）

私は社会人になってから大学に入ったので、今のほとんどの麗大生とは異なる経験をもつ。高校から大学へというごく普通の進路は、あの時代（文化大革命、一九六六～一九七七）の中国の若者にとって、ほとんど不可能だったので、学校に戻って勉強する道は決して平坦ではなかった。ただ、開き直って言えば、大学に入らなくても生きていけるという経験は、むしろ、その後の勉強に大いにプラスになった。情報革命の風雲児、ビル・ゲイツも、大学を中退したではないか。世界中の大学教授が彼の会社を研究し、彼が編み出したソフトを使い、彼らが提唱した情報革命、IT、マルチメディアなどなどのコンセプトに翻弄されていることを考えれば、自ら（おのずから）大学の限界が見えるだろう。不遜に聞こえるかもしれないが、私たちの世代は、教師に対して、疑いの眼鏡をかけて見ているから、よりよい勉強が出来たと思っている。

このごろ、息子や学生に、「中国では、曹操はよい人で、劉備は悪い人だという見方もありますよ」と言ってみたら、案の定、猛烈な反発を喰らった。これは、彼らが頭に組み込まれたイメージと異なる意見、見方を受け入れる柔軟性をもっていないことを示しているわけだが、さらに言えば、知らず識（し）らずのうちに、自分の頭で考えることを忘れ、単なる丸暗記動物になってしまっているということである。悲しいことではな

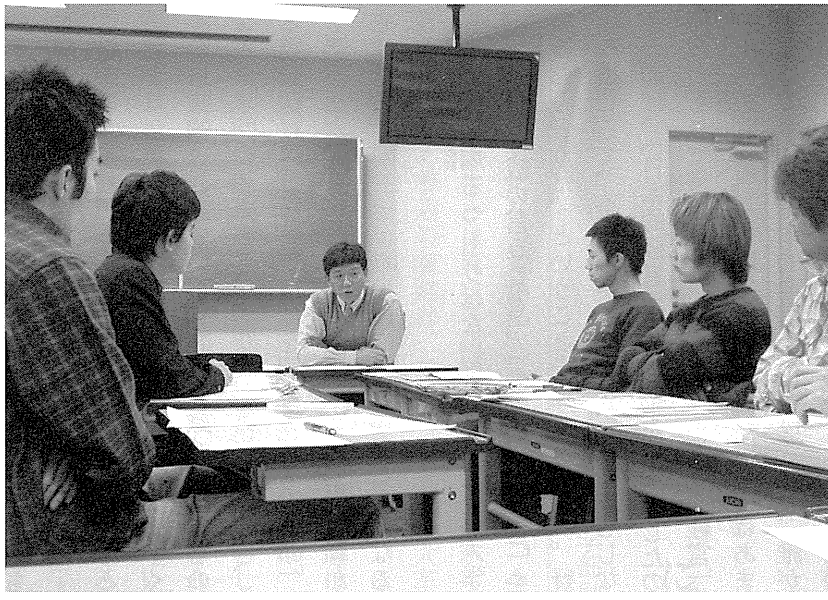
いか。息子には、せめて「えー？　そんな見方もあるの」という言葉を期待していたのだが。

学問はまず、問うこと――つまり疑問、疑うということがなければ、始まらないし、進まない。多くの教師が日常的に言っている「問題意識」というものは、まさに学問の魂であり、「問」のない「学」は、単なる猿真似に過ぎない。運転を例にすれば、「問」は道を選ぶこと、「学」は道を覚えること、車を動かすことに当る。道を選ばない運転はどんなことになるだろうか。

猜疑心を煽るつもりはないが、わが麗澤大学生に「定説」、「権威の言うこと」、「教師の言うこと」を疑ってみたらどうだ、ということを強く勧めたい。疑ってみたところで、金はかからないし、別に損もしない。たとえば、「日本的経営」とは、誰が言い出したのか？何のつもりで言ったのか？　なぜ「米国的経営」、「フランス的経営」、「中国的経営」ということはあまり聞かないのか？「日本的経営」が流行ったら、誰が得になり、誰が損になるのか？…こういうふうに疑ってみれば、「日本的」という言葉にいい気になり、ほめ殺されて最終的に泣きを見るということを防げるかもしれない。

今はカーナビという優れものが流行っている時代だ。ほとんどの場合、ナビは自動的に最適な道を選んでくれるから、運転はだいぶ楽になった。しかし、この優れものにも限界がある。たとえば、このまえ、帯広から富良野経由の道を通って札幌へ行きたかったのに、機械はひたすら西へ西へと怪しい方向を指示する。どこかで条件指定を間違ったのかもしれないが、結果的に、疑ってみてよかった。

逆の立場に立って見ることは、学生時代の面白い体験だった。討論をしていて、反論の言葉に窮して、「おっしゃるとおりだ」とお手上げしたら、相手が立場を交換して、「私ならこう反論する」と別の論法をみせてくれる。碁をやっていて、私が非勢を認め、投げるところで、相手は白黒を交換して、私が投げようとした碁を逆転してみせる。ブリッジというカードゲームも、「複式試合」という相手のカードを使ってもう



ゼミで指導する趙家林助教授

一回プレイするやり方で、アンラッキーの要素を排除して行う。こういうことを日常的にやっているから、教室で質問したり、議論したりして口を開くことをためらった覚えはなかった。「ばかな質問をしてしまい、とても恥ずかしい」と思ったことはないし、そんなことを思わせる雰囲気もなかった。

教師に対する盲信ということはなくても、私たちの世代は猛烈に勉強した。なぜかと言うと、疑っても分からないからだ。勉強すればするほど、自分の無知と浅知恵に気が付く。好奇心が湧いてくる。

それに、多くの知識や技能、テクニカルなものに関しては、やはり、きちんと模倣することや、時間をかけて覚えたり、練習したりすることが必要だ。語学はいい例だ。数学の天才ということはよく聞くが、語学の天才、特に口を動かさずに、外国語をべらべら喋る天才がいたためしはない。語学はある意味でスポーツと共通する。運動神経に関して個人差があるのは当たり前だが、練習せずにメダルが取れるはずはないと、誰しも思う。それなのに、語学の授業で「省エネ」モー

ドに入っている学生に結構、お目にかかる。蚊より小さい声で練習すれば、「国際交流」できると自信を持っているのかと、いつも不思議に思う。

私はよくスポーツクラブに行って練習せずに、お風呂だけ入って帰るという情けない行動をするが、そこで練習している振りをする人に出会ったことはない。「クラブには単位がないよ」と反論されそうだが、学校にしろ、スポーツクラブにしろ、自分の意思で金を払った上で通っているのだから、「振り」だけして帰るのは、やはりもったいない。

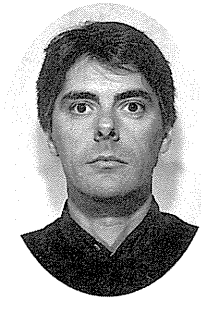
自分の大学生活を振り返るとき、私は常に、クラスメイトに恵まれていたと感謝の気持ちを持つ。私のクラスには、受験地獄を全国第二位の成績でくぐりぬけた優秀な同級生がいた。みなはいつも彼に対して尊敬と畏怖の感情をもち、コンプレックスを持っていた。天才に近く見えた。どんな難問でもすいすい解けるし、どんな科目も必ずAをとる。われわれ凡人にはとても及ばない、何か神通力をもっているかのように見えたのだ。ところが、あるとき、彼の机に残されていたメモ用紙を覗いてみたときの衝撃は、今でも忘れられない。なんのことはない、神様に見えた天才まがいの彼は、われわれ凡人と同じように、英単語を繰り返し紙のうえに書き、単純な方法でスペルを覚えようと練習していたにすぎなかった。こんな神業なら、誰でも出来るじゃないかと、大変勇気付けられた。感激の一瞬だった。

テレビではよく「何々チームがどこそこで報道陣を締め出して秘密練習を行った」といったニュースが流される。そのとき、私はいつも天才の神業を思い出す。秘密か、何かの新機軸もあれば、ただの単純作業もありうる。天才を疑ってみよう。一〇〇％の新機軸を出し続ける天才はいないだろう。そんなことをまねしようと思っても出来っこない。そんなことより、天才の単純作業を盗もう。われわれ凡才でも、凡才なりのことをうまくこなせば、越えられそうもないと思った壁を越えるようになるかもしれないのだから。

〈特集〉 外国人から見た麗澤大学 ―― ここがヘンだよ麗大生!! ⑭

麗大生の特徴
―オーストラリアの学生と比べて―

国際経済学部教授　スコット・デイヴィス



麗澤大学の学生を見ていると、何年も前に送った自分の学生時代を思い出す。その頃と今を比べると、麗澤大学の学生を特徴づけるいくつかの対照的な相違点が見えてくる。それらは、競争と協力、労働時間と勉強時間、付き合いと監督である。

競争と協力

私が学部時代を過ごした頃のオーストラリアには、私立大学はなかった。いわゆる日本の「国立」大学のような、国営の大学だけだった。学費は無料、入学試験もなかった。(通常の三年制高等学校を卒業後、さらに二年間学ぶ)ハイヤー・スクール(higher school)を卒業していれば誰でも入学できたからだ。ハイヤー・スクールを卒業するためには、ちょうど日本のセンター入試に似た国家試験を受験しなければならなかった。受験生は一〇〇〇点満点で評価された。これはＴＯＥＦＬにも似ているが、ＴＯＥＦＬやセンター試験とは違って、受験できるのは一回限りである。各大学の学部は一定の合格最低点を設定し、毎年出願者の中から合格点に達した受験生を、無制限に“fresher”(新入生)として迎え入れた。

大学の課程に入学するのは出願すればよいだけのことだが、ハイヤー・スクールとは異なり、大学の課程を修了するのはもっと複雑かつ困難である。麗澤大学

と同じように、例えば、建築学、医学、臨床心理学などの課程は、一定の順序で履修をしていく複数の科目から構成されていた。しかし、麗澤とは異なり、必修科目が順次履修となっており、一年次の科目を修了しなければ、二年次の授業を履修できなかった。ほとんどの科目は順次履修であり、前提となる必須科目が設定されているか、専攻分野の科目群から一定の単位数を取得することが義務づけられているかの、どちらかだった。

このように関係学部、学科が直接実施する入試制度は存在せず、高度に組織された必修科目の順次履修制度が設けられていた。そのため学部開設科目の順次履修制度が、教室という環境の中で、入試に代わる選抜システムとして機能していたのである。したがって授業が実質的な選抜の場だった。たいていの学生は単位を落とし、中途で諦め、履修を取り消すか、専門を変更し他学部に移るか、あるいは退学するかの選択をめぐって、指導教官から指導を受けた。

学生の置かれたこうした環境が、熾烈な競争をもたらしたのは容易に想像がつく。優等生ばかりのクラスともなれば、学生同士が協力し合うことは稀だった。それどころか、授業で数名の学生が共同謀議をたくらみ、他の学生をだますことすらあった。自分たちは次回の授業のための読書リストに載っている書籍のうち、一、二冊だけを集中して読んでくればいいと、ライバルの学生たちに言いふらし油断させておいて、実は自分たちだけすべての書籍を読み、なおかつ授業で満足のいく発言ができなかった場合を想定し、その授業のテーマについて自分なりの考えをまとめたペーパーを教授に提出したのである。クラスメイトとの議論は、自分のアイデアを盗むことのない、信頼の置ける学生との間に限られた。いずれにせよ、学生たちは大半の時間を勉学か体育館でのトレーニングに充て、ほとんどの議論は授業内に限られていた。

私の親友に、良い成績をとる最良の方法は人よりも長い時間勉強することだと決めこんだ学生がいた。この学生は、中庭を囲むロの字型のこぢんまりした学生寮の寮生だった。彼は中庭をのぞむ部屋に住んでいた

が、毎晩自分の部屋から見える部屋の電灯がすべて消えるまで勉強を続けた。そうすることが最も勤勉な学生の姿だということになる。ところが、どうしても打ち負かせない部屋があった。疲れて本を置こうとして、ふと窓の外を見ると、まばゆいばかりの光を放つ部屋が目に入った。何カ月も競争をしたあげく、打ち負かすことのできなかったその部屋の住人を訪ねてみると、それは五階にある女子トイレの常夜灯だった。

麗澤の学生は、協力を犠牲にしてまで競争する必要はない。私が教えた、成績の良い部類の麗大生の多くは、他の学生と協力しながら勉強することができるという強みをもっている。

労働と勉学

オーストラリアの学生生活における、学業面の競争とプレッシャーを考えれば、ほとんどの学生が学期中にアルバイトをしなかったのは当然である。そのかわりオーストラリアの学生は、休暇中にアルバイトをしてお金を貯めることができた。また、国の奨学金制度があった。そのため、労働と勉学を結びつける必要はほとんどなかった。日本の学生に与えられる奨学金と違って、家計調査に基づくオーストラリアの奨学金は、家庭から離れた学生が生活するには十分であり、しかも返済の義務がないので、将来に借金を残すことにはならなかったのである。

といっても、誰もアルバイトをしなかったというわけではない。ときに学生たちは、心理学やその他の学部で実施される実験に参加して収入を得たものである。コードで測定装置につながれ、画像を見せられたり、臭いを嗅がされたり、あるいは他の刺激を与えられたりするのは、確かに決して魅力的な仕事ではない。だが、こうした機会を通じて高度な研究をする大学院生と語らい、共に仕事をすることは、常に新しい考えの源であり刺激でもあった。

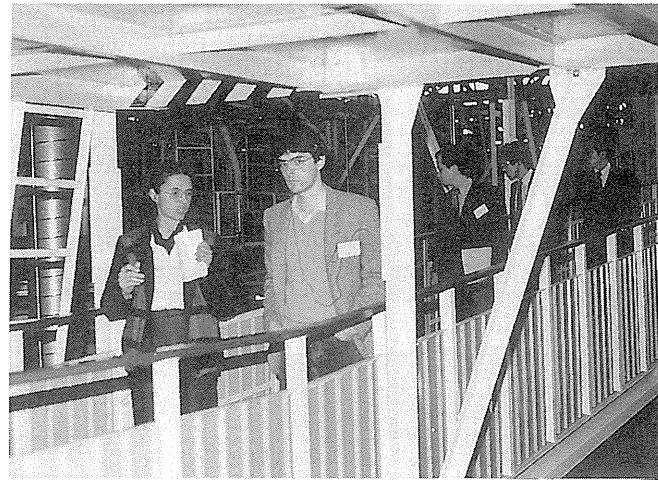
勉学に費やす時間と同じほど働く学生と初めて出会ったのは、麗澤大学だった。そのような学生には、働くのを止めてもっと勉学に時間を割くようにと、当初は指導したものである。

研究室でゼミ生に指導するデイヴィス教授

しかし数年前のこと、コンビニエンス・ストアの経営プロセスを分析した私のゼミ生のプレゼンテーションを聞いた。コンビニエンス・ストアの経営は、「コンビニ」という概念が長年の発展過程を経るにつれ追加されてきた様々なシステムが総合されたものである、というのがプレゼンテーションの主題だった。一言で言うなら、そのゼミ生は「コンビニ」における生産性と能率が向上していく過程を、異なる複数のシステム間の矛盾が解消されていく過程として捉えたのである。この考えは目を見張るほど成熟したものであり、洞察に富んでいた。実はこの学生は数年間コンビニでアルバイトをした経験がある。彼のこうした洞察は、アルバイト先の現場で浮かんだ数々の疑問点を問いただし、発生した諸問題の意味するところを学んできた、彼の経験に裏付けられていた。

安い労働を提供して他人の事業を援助するだけのために授業料を支払う愚は大目に見ることができないとしても、（特に経営学を専攻する学生にとって）経験の価値は否定できるものではない。金銭欲と好奇心と

の間には差があるものの、私の知る成績のよい麗大生は、教室を離れた場でも、継続して学ぼうとする姿勢を保っている。



ニュー・サウス・ウェールズ国立大学大学院に在籍中、組織学会主催の自動車工場見学に参加（左から２番目がデイヴィス教授）

付き合いと監督

オーストラリアの大学では教授の人数はごく少ない。アメリカの大学制度（基本的に、現在の日本で採用されているものと同じ）とは異なり、オーストラリアの大学教員は、教授というよりはむしろ個人指導教師、講師または主任講師に近い。三〇～四〇名の大学教員のうち一名が正教授である。教授は（学内、学外を問わず）一般に重要な存在であり、多忙極まりない。学生がいくら議論を重ねても、あるいは充分準備をしてきても、教授はそれを遥かに越える見識を備えた恐るべき存在である。

教授とのやり取りはいつも決まって忙しなく、結果志向である。学生は自分の研究結果またはある研究に対する自分なりの批評を提出し、次の課題を受け取るという具合である。大切なことは「何を」「いつまでに」であり、「なぜ」「どのように」というような問いは、時間の無駄のように思われていた。

私が麗澤大学に赴任した最初の数年間は、オースト

ラリアの大学で担当したセミナーで身につけた「監督」という方法を採用したのだが、その方法は役に立たなかった。成果もはかばかしくなく、成績評価は往々にして要を得ないものに終わった。しばらくして、麗大では「何を」「いつまでに」よりも、「なぜ」「どのように」の方が重要であることが分かった。

麗大生は、いや膨大な情報が瞬時に手に入る現代なら、恐らくどの大学の学生も、議論には大きな関心をもつが、情報それ自体をあまり積極的に追い求めようとはしない。情報は巷に氾濫し、安く手に入る。さらに、情報が伝えようとする意味を犠牲にしているだけに、この傾向にはますます拍車がかかる。ITブームは、確かに溢れんばかりの「意味を無視した」情報によって支えられてきた。

麗大生の多くは、自分たちの弱点をさらけ出すことに長けている。つまり、麗大生はすぐに議論を始め、議論の中で、自分たちが分からない部分を言葉に表すのである。こうした行為は、自己の重大な欠点を他人に示すようなものであり、私の学生時代には考えられなかった。

私は授業時間外に毎週何度となく、個人あるいはグループで学生と話す機会をもった。そんな時、決まって学生は、将来の職業について語り、就職の面接試験の練習をし、私を訪ねてくる卒業生と語り合う。このような議論は長い時間がかかり、時には重荷でもある。オーストラリアの教授がなぜ学生の訪問を避けるのか、よく理解できる。しかし、こうした議論のお陰で、個々の学生の特性に配慮した授業をデザインしやすくなるのも事実である。麗大生はしばしば、「状況重視」に対して「過程重視」の勉強法に秀でている。

麗大生の特徴は、長期的・経験的・協力的

麗澤大学の多くの学生は、真の意味での競争に欠け、さまざまな課外活動に関心を示し、単独では意思決定がなかなかできないために、学業に関しては、過程を重視するために長期的で、自らの経験と仲間との協力を重んじる方法を用いて成果を上げている。将来こうした方法がどのような発展を遂げるものか、楽しみなところである。

〈特集〉外国人から見た麗澤大学――ここがヘンだよ麗大生!! ⑮

座談会――学内における「異文化間交流」を深めよう!!

二〇〇二年一二月一七日（火）に左記の外国人留学生三名と日本人学生三名の出席者により、「学内における『異文化間交流』を深めよう」というテーマで座談会を開きました。麗澤大学において、外国人留学生と日本人学生が、互いの文化に関する理解を深め、より望ましい活発な交流をしていくためのヒントになるような楽しい話題が多くあり、二時間にわたってなごやかな雰囲気の中で、忌憚のない意見交換が行われました。以下にその主な内容を紹介します。

（司会・文責　朴　勇俊）

〈座談会出席者〉

司会：朴勇俊（外国語学部助教授・編集委員）

外国人留学生：金貞淑（外国語学部日本語学科三年、韓国）
S・ヴァーグナー（外国語学部特別聴講生、ドイツ）
郭強（国際経済学部国際産業情報学科四年、中国）

日本人学生：稲垣博子（国際経済学部国際経済学科三年）
小松益徳（国際経済学部国際経営学科三年）
谷岡光世（外国語学部中国語学科三年）

留学のきっかけ
――「空手にあこがれて!」――

司会　今日は個性豊かなメンバーが集まりましたので、楽しい話が聞けると思います。まずは留学のきっかけについて話を聞かせてください。

司会の朴編集委員

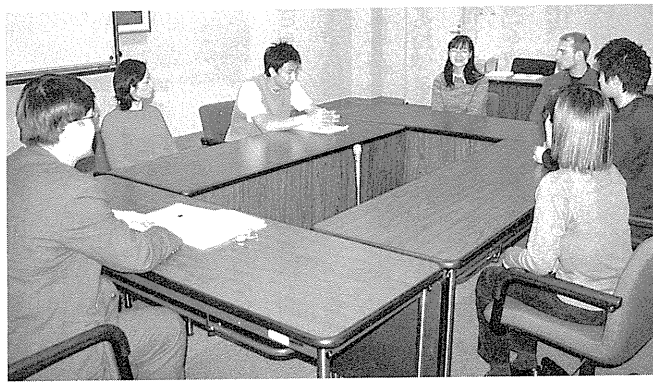
金　私は結婚して主人の仕事のために日本に来たのですが、日本にいるからには日本語を勉強しようと思い、麗澤大学に入学する事になりました。

ヴァーグナー　最初は日本の武道に興味をもって、空手に取り組みながら日本語の勉強を始めたのが留学のきっかけです。

郭　小学校から中学校、高校、大学までずっと一緒だった友達の一人が日本に来たことがきっかけで、日本に対する興味を持つようになりました。

稲垣　私はアメリカのサンノゼ大学に留学しました。語学の勉強と、自分の専門のビジネスが少しでも勉強出来ればいいなと思ったのと、色々人生経験になると思って、留学することにしました。

小松　何か新しいことをやってみたかったし、ロンドンという街の持つ雰囲気にあこがれてイギリスに留学しました。



「異文化間交流」について話し合う座談会メンバー

谷岡　麗大のプログラムで台湾に留学しました。それと今年の夏休みには、中国の大連に一カ月だけ留学しました。

留学生の日本生活
―「納豆だけは食べられません！」―

司会　留学生のみなさんが日本に来て、日常生活で体験した事、感じた事について話を聞きたいと思います。例えば食習慣でとまどった事はありますか。

金　食事の時に、韓国では器を手に持たずに置いたまま、スプーンと箸を使って食べるんですけど、日本ではお椀とかを手に持って、箸だけで食べるんですね。韓国では器を持って食べると、なんて行儀が悪いんだと思われるんですよ。だから初めのうちは、なかなか手に持って食べることが出来なくて。それから韓国では、こっちでいう味噌汁の中にご飯を入れて混ぜて食べたりするんですけど、日本ではそれをしない。だから最初は、周りを見ながら気を遣いました。

郭　僕は納豆だけはどうしても食べられません。すご

く体に良いというのは知っていますけど。ただ、食文化的には違和感がなくて、すぐに慣れました。

一番慣れなかったのは、精神的な部分です。特に日本人は真面目できっちりしているので、例えばこのお茶を出すのも、まずはこっちにおいて、それはあっちにおいてというように、ちゃんと一、二、三という基準があるんですよね。また、こちらは偉い人だから敬語を使わなければいけないとか。最初はそういうのがわからなくて、色々なまちがいとかよくありました。中国文化と日本文化、どっちが良いかと言ったら、両方とも良い面と悪い面とがあって、難しいです。

郭さん

司会　ヴァーグナーさん、日本の住まいはドイツと違って畳の部屋があるし習慣も違いますね、そういったところで何かとまどいはありませんでしたか。

ヴァーグナー　いいえ、ぼくは空手をやっているから正座もだいじょうぶだし、和室の方が何か静かな雰囲気があると思うんです。畳がある部屋に入ると気分がリラックスする。それからコタツは、和室の畳の上にごろごろして勉強できるので、すごく便利ですね。

日本人学生の留学体験
―「一度会ったらもう友だち！」―

司会　今度は日本人学生が留学体験を通じて感じたことについて聞いてみましょう。

谷岡　私は中国と台湾での留学経験があるんですが、たとえば台湾に行っていた時に、台湾人はすごく親切なんです。一回会っただけで、もう友達なんですよ。一回会ってちょっと言葉を交わしただけなのに、自分がちょっと何か困っているというようなことを言ったら、全面的に協力してくれるんですね。ただ、国同士はいろいろ問題があったりしますよね。だから中国へ行く時も、最初はちょっと不安で、日本人だからみたいに言われるんじゃないかと思って。でも、実際一人一人と話したりすると、絶対仲良くなれるんですよ。お互いに良い所もある、悪い所もある。それは日本人

同士だって一緒ですよね。だから国籍と関係なく、人が人として互いに理解し合い親しく交流すればきっと仲良くなれるし、世界はいつの間にか一つになれるんじゃないかということを、たびたび思いましたね。

小松　僕はロンドンという街のもつ伝統的でかつ革新的・前衛的な雰囲気にあこがれて、イギリスに留学したんです。ライブに行って音楽を楽しんだり、イギリスの伝統料理やさまざまな国の料理を食べたり、いろいろな経験ができてとてもよかった。自由な雰囲気の中にも、伝統的なものがちゃんと根づいているということを感じました。逆に日本独特の文化や伝統を日本の僕らの世代はもっと大切にすべきだし、外国人留学生にもぜひ知ってもらいたいと思います。

小松さん

稲垣　いろいろなしがらみが多い日本を抜け出してみたいと思ったことが、海外に留学しようと思った理由の一つだったのですが、実際に外国で生活してみると、日本の良いところもいっぱい見えてきて、今は両方の良い所をとり入れていければいいなと思っています。

日本の大学生の特色
―「はっきり言わないのも思いやり!?」―

司会　皆さんが留学体験を通して感じた日本の大学生の特色といえば、どういうものがありますか。

谷岡　日本では授業中に本当に発言しづらい。たとえば自分がばっちり予習してあって、やる気があっても、周りの人があまり発表しないから、先生が発言するようにといっても発言するのに勇気がいります。また、発表しても間違えると、「あの人あんなの間違っているよ」みたいな、そういうのが微妙に伝わるんですよね。また、自分が正しい答えを連発しても、「あいつ、いきがってるな」みたいに思われそうだし。

金　それはあると思いますね。私たち留学生もこの大学に留学して一年の時は、結構、発表したりするんですけれども、三年生ぐらいになると段々日本人化して、

あまり発言とかしないようになるみたいです。

金さん

郭　僕は日本語をしゃべっていると間違いばかりなんですよ。でも、だからしゃべる。もし僕が完璧に日本語がしゃべれるなら、日本語学校にも行かないし、授業も受けないです。なるべく自分がわからないことを人に示す、そこから勉強が出来るという事ですね。それが目的で学校に入って、教室で先生の授業を受けるわけですからね。

ヴァーグナー　はじめは、日本人学生が自分の意見をあまり話さないのは、本音を秘密にしようとして私に言わないのかなと思って、だから私のことが好きじゃないのかなとも考えました。でも二人でいると良い話ができるんです。でも日本人の話し方、あまりディスカッションにならないから、人が大勢いると、そんなふうにはいかないみたいです。

金　私は最初、日本人学生がもっと自分の意見をはっきり言ったほうがいいんじゃないかと思いました。でも、たとえば韓国人は自分の意見を主張して、喧嘩しながら親しくなるという傾向があるんですけど、日本人の場合、はっきり言わないことでお互いに相手を思いやるという面もあると感じるので、今はそれもいいなと思いますね。今年の九月に日本人学生たちと韓国旅行をした時のことですが、韓国人だったら色々言われたりしたと思うんですけど、全然それがなくて、よく協力してくれて、楽しく良い旅行が出来たなと思いました。

留学体験を通じて気づいた麗澤のよさ
―「人間的なかかわり！」―

司会　日本人学生のみなさんが海外留学していた時に、外から見て気づいた麗澤大学のよい点としては、どんなことがありますか。

小松　麗澤大学では、一人一人の先生と密接にかかわることができるし、先生方が親身になって話を聞いて下さるので、人間的で親密なふれあいができるんじゃな

いかな、と思います。留学先では、僕の個人的な感じ方かも知れないけど、すこし事務的な感じがしましたので。

稲垣　うちの大学は出席に関して厳しいとか、課題をちゃんとしないとよい成績が取れないと聞くので、そういう面では、学生が勉強する環境というのが、他の大学よりきちっとしているのではないかと思います。

小松　麗大は三千人ぐらいの規模の大学で、こういうふうに皆で学んでいるわけですけれども、教務課の人とか学生部の方と仲良くなって、顔を覚えてもらって、個人的に話が出来たりします。

稲垣　人数が少ないとクラスがこぢんまりしていて、自分のやりたい事がやりやすいというのもありますね。

稲垣さん

留学生と日本人学生のふれあい

―「いちばん良い日本の友だちができた！」―

司会　皆さんは日本人学生や留学生と普段どういう交流をしていますか。

金　私の場合は、韓国人の留学生の集まりを通じて日本人学生と色々な料理を作ったり、それをいっしょに食べながら交流したりしています。また普段、学校の中で会った時にも、気軽に声をかけたり話したりしていますね。勉強の面でも、わからないところはまわりの日本人学生に聞いたり、逆に韓国に関して、日本人学生が韓国に行く時どうすればいいかなど身近な情報交換もしています。

稲垣　私は同じゼミに別科の留学生が参加しているので、彼と色々な話をしたり、英語についてわからない事を教えてもらって、私は日本語について彼がわからないところを教えてあげたりしています。

郭　僕は麗澤大学で四年間、寮に住みながら勉強していて、一番良い日本人の友達が一人できました。彼は二人で話す時に、本当に良いアドバイスをしてくれるし、彼との交流はすごく勉強になるんです。僕は彼に本当にお世話になっています。彼は今、異文化間理解に関するゼミにも出ていて、他の外国人学生ともいろ

いろ積極的にコミュニケーションをとろうとして活動しています。僕もそれを見習いたいと思っています。

谷岡さん

留学生と日本人学生の交流を深めよう
―「身近な場所からコミュニケーション！」―

司会　留学生と日本人学生が互いに理解を深め、より親密な交流をするにはどうすればよいかについて、まず留学生からアドバイスやメッセージをいただきたいと思います。

金　私は他の学科の人と一緒になる授業が多いので、その時に顔を覚えたりして、授業以外でも見かけたら声をかけるようにしています。だから、まずは授業で会ったら、色々な話を親しくするようにして、その輪が広がっていけばいいなと思います。

郭　外国人学生たちに対する興味を持つように、そういう環境を作ってあげた方がいいと思います。例えば留学生へのQ&Aのコーナーみたいなものを作って、誰でも名前書かなくてもいいので、外国や外国人に対して素朴な質問などがあれば、紙に書いてボックスの中に入れるとか。最初はそういうやりとりから始めたらいいんじゃないでしょうか。生活の周りのすぐ手が届く場所に、そういうコミュニケーションのための面白い道具が置いてあれば、そこから興味を持ち始めるかもしれないですよ。

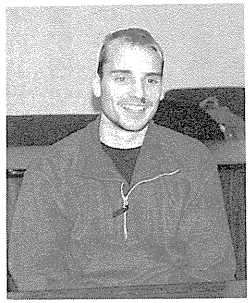
ヴァーグナー　交流は、他の人に対して興味や関心を持つことが必要ですね。そして自分から相手に積極的に近づいていくようにした方がいいと思います。そのために、外国人学生にあまり関心がない学生とも交流する場を作って話しあったり、またそういうことに大勢の人が興味を持つような機会がたくさんあればいいと思います。

交流の場をつくろう
―「祭りをやりましょうよ！」―

司会　日本人学生と留学生が交流する機会は、今でも

結構あると思います。留学生歓迎懇親会や国際交流餅つき大会、それからＲＩＦＡ（麗澤国際交流親睦会）の人たちの活動を通じて、実際に地道な交流が行われていると思うんですが、そういう活動をより幅広く知らせることと、学生自身が積極的に参加しようとする意識をもつことが大切だと思いますね。それでは、今度は日本人学生から留学生に対するアドバイスやメッセージをお願いします。

稲垣　そうですね、私もみんなが興味をもてるような交流のチャンスや情報を、もっとみんなによく伝わる方法で、たくさん提供した方がいいと思います。たとえば宣伝の方法として、ポスターをエレベーターの壁にも貼って、どんな人の目にも触れることができるようにするとか。


ヴァーグナーさん

谷岡　留学生には、いろいろな機会を通じて、日本人の友達をたくさん作ってほしいですね。そうすれば話す機会も増えるし、一人の友だちよりも一〇人ぐらいいた方が、色々な意見を聞くことができて、お互いの事をもっとよく知ることができると思いますので。そうやって色々な友達と交流する中で、日本や日本人について知ってもらいたいですね。

小松　祭りをやりましょうよ。今月は韓国祭り、来月は〇〇祭り、というように。

谷岡　そういう面でも、うちの大学は国際色に富んでいると思いますね。今年の学園祭でも、たとえば各国の料理を紹介するコーナーでは、台湾料理、中国料理、ドイツ料理、ベトナム料理、トルコ料理、タイ料理、韓国料理などの店がたくさん並び、多分世界中の料理を楽しむことができたと思います。

司会　みなさん、今日はどうもありがとうございました。異文化間交流の現場である麗澤大学の学生生活の中で、留学生と日本人学生がより望ましい交流を深めていくにはどうすればいいか、という事を考える有意義な時間であったと思います。

〈麗澤大学の留学生受け入れ態勢〉①

多様性に富む日本語教育を目指して

日本語教育センター
センター長・教授　松本哲洋

日本語教育センターは、平成一三年に開設されたばかりの出来立てホヤホヤのセンターです。それまで留学生に対する日本語教育は、別科生、両学部の留学生・特別聴講生（外国との交流校の留学生）、台湾からの淡江大学生の三つのグループに分かれて、それぞれ別の組織によって行われてきました。しかし、別科以外はクラス数が少なく、一クラスで日本語能力差がある学生に教えており、充分に効果をあげることができませんでした。またそれぞれの組織が同じようなことを教えており、本学全体の日本語教育から考えると効率がよくありませんでした。そこで以前からあった日本語教育センター構想が浮上し、一昨年、日の目を見ることになりました。

本センターの目的は、本学全体の日本語教育を統括し、本学に在籍する外国人留学生に対して、学習者の日本語能力に応じたレベル別クラスで、体系的かつ総合的な授業を行い、大学での勉学に対応できる日本語運用能力と多文化におけるコミュニケーション能力を培うことです。その目的を達成するために、左記の三つの柱を建てています。

一、日本語教育：大学での勉学に対応できる日本語運用能力が充分でない者にその能力をつける

二、日本文化・事情：日本人学生とともに日本・国際理解のための知識を学び、日本での生活経験の浅い

者には生活を送る上での技術を身につけさせる

三、多文化共存・*共動：文化背景（各留学生と日本人学生の文化）の異なる者が同じ場を共有し、何らかの活動を通して効果的にコミュニケートできる能力を養成し、異文化で生活するための支援を行う

*（共動＝受け身ではなく、学生自身が共に能動的に学ぶという造語）

センターの授業は、基本コースと技能別コースの二つのコースがあります。基本コースは、初級から上級まで四つのレベルに分けて、週一五コマで集中的に基本的な日本語を勉強するコースです。別科生（六七名）だけでなく、イェーナ大学・アメリカ奨学生の特別聴講生（四名）、日本語学科留学生（一名）、大学院研究生（一名）の計七三名の学生が勉強しています。四名の専任教員がおり、それぞれのクラス担任をしています。

技能別コースは、読解、作文、聴解、聴読解、会話の五つの技能ごとに七クラスに分けて週五コマで、学習・研究に必要な日本語能力を養成するコースです。日本語学科留学生（一四名）、国際経済学部留学生（一九名）、淡江大学生（三〇名）、別科生（四〇名）、大学院研究生など計一一〇名の学生が勉強しています。各技能別に専任教員がコーディネーターとなり、カリキュラムなどを作り、授業を進めています。

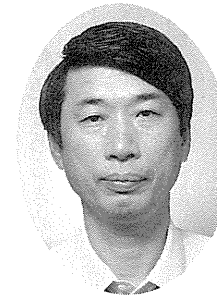
センターの教員は、七名の専任教員と一一名の非常勤講師がいます。センターの特色であるきめ細かな授業を行うために、毎日昼休みに話し合いをして意思の疎通を図ったり、コース及びクラスごとに専任教員を充てたりしています。休み時間には学生が質問や宿題を提出に来るなど、センターの教員室はまるで中学校か高校の職員室のようです。一度見学に来てみてください。

日本語教育センターの教員室で定例会議

〈麗澤大学の留学生受け入れ態勢〉②

「麗澤に来てよかった」と思える環境づくりを

国際交流センター
センター長・教授　三瀦正道



本学の外国人留学生受け入れの歴史は、昭和四七年の麗澤日本語学校開校に始まり、その後、昭和五一年別科日本語研修課程、昭和六三年日本語学科、平成四年国際経済学部、平成八年大学院が開設されるに伴い、年々、より多くの外国人留学生（以下留学生）が本学で学ぶようになりました。現在では、一六の国や地域から来た四九四名の留学生が本学のキャンパスで学んでいます。

一方、留学生の受け入れ態勢も、時代の流れにあわせて、留学生課、国際交流課、そして現在の国際交流センターへと発展して来ました。現在では、センター長以下九名の教職員が、留学生の受け入れや日本人留学生の送り出しに携わっています。

本センターの業務の中で最も重要な仕事は、海外からやってきた留学生達に対する様々なケアです。センターは過去二回「留学生の実態調査」を実施し、その結果、留学生が、アルバイトによる時間的制約のため、日本人と交流したり、友だちをつくることができず、困ったことがあっても一人で悩む傾向にあることがわかりました。そこで国際交流センターでは、学内では学生同士が交流できる場を、学外では地域との交流の場を設けることに主眼をおいて活動を展開し、特に国際交流に対する地域の方々のご理解とご協力が得られるよう努めてきました。

センターの年間行事は多種多彩です。そして、それらの行事の実施には、学生諸君の協力が欠かせません。例えば、留学生のための新入生オリエンテーションでは、それぞれの国の先輩が通訳に協力してくれますし、また、キャンパス見学では、ＲＩＦＡ（麗澤国際交流親睦会）の学生諸君が手伝ってくれます。四月下旬に開催される留学生歓迎懇親会では、新入生が早く本学の雰囲気に溶け込めるようにと、先輩留学生がそれぞれの民族舞踊などを披露、今では、本学の名物行事にまでなっています。

留学生１日バス旅行で
東京・浅草寺を見学

日本での生活に慣れた七月、八月には、日本の家庭を経験するホームステイやホームビジット、また、二学期には、留学生に日本の名所や文化を知ってもらうために、バス一日旅行（浅草や、犬吠埼燈台の見学、九十九里浜での地引き網体験、益子での絵付けなど）を行ってきました。

地域交流推進では、上述の留学生歓迎懇親会に地元の商店主や近隣の国際交流団体を招き、留学生へのご理解とご協力をお願いしてきました。また、周辺の高校や中学校から、国際理解教育の一環として留学生派遣の要請があったときには、留学生の都合がつくかぎり協力するようにしています。

柏、松戸、流山などの地域の国際交流団体との交流も徐々に実を結び、平成一四年夏の香港理工大学生受け入れでは、柏の国際交流団体と受け入れプログラムで連携することが出来ました。今後も、地域の団体等と積極的に交流を推進していきたいと考えています。

留学生の受け入れは今後ますます増える傾向にあり、内容の一層の充実が求められています。麗澤に来てよかった、日本に留学してよかった、と留学生が思えるような環境作りを目指して、今後、一層の努力をしていきたいと考えています。

〈麗澤大学の留学生受け入れ態勢〉③

留学生の愉快な仲間たち

麗澤国際交流親睦会（ＲＩＦＡ）
代表・国際経済学科三年　鈴木絢子

私たちＲＩＦＡ(Reitaku International Friendship Association 麗澤国際交流親睦会）は、国際交流を目的としたサークルです。ＲＩＦＡは麗澤大学の国際色豊かな特色を生かして、留学生と日本人学生との交流を深める機会を作ろう、ということから誕生しました。もうＲＩＦＡが誕生してから、一二年が経とうとしています。今では、留学生と友達になりたい人、日本人学生と友達になりたいと思っている人達が自主的に集まり、様々なイベントを通じて交流・理解を深めています。

主な活動内容は、留学生の入寮やオリエンテーションのお手伝いから始まり、留学生歓迎懇親会、会話練習と続きます。特に会話練習は、留学生と日本人学生との交流を図る場として大きな役割を果たしています。これは、留学生と日本人学生とがペアになり、会話を通じて交流・理解を深めていくというものです。ＲＩＦＡの基本活動として毎年続けられ、留学生が訪れる度に行われています。この会話練習がきっかけとなり、交流パーティーなどの次のイベントへと繋がっていきます。その交流パーティーでは、球技を行って汗を流しました。スポーツを通じて親睦を深め、「国籍など関係ない！」という絆を得ました。

また今年の学園祭では、国際交流・国際理解の一環として「トルコ」という国に焦点をあて、展示・出店を行

いました。麗澤大学の学部・大学院で唯一のトルコ人留学生であるアフメットさんを中心に、出店では「トルコ風春巻き」を、また展示ではトルコの紹介をしました。そこで私たちだけでなく観覧に来てくださった方々も、トルコの魅力に興味・関心が深まったと同時に、知識も得られたかと思います。

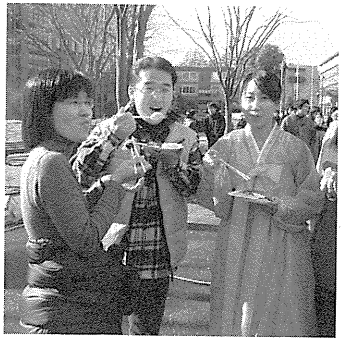
留学生歓迎懇親会終了後、
RIFAのメンバーとともに

一二月には大学のイベントである餅つき大会を任されました。日本の伝統文化である餅つきを通じて、留学生と日本人学生との交流の輪を広げることが目的です。メニューも昔からある「あんこもち」から「台湾風ピーナッツもち」など、数多く取り揃えました。今年も多くの留学生と日本人学生で賑わい、好評を得ました。

毎年このような活動を行っています。今後は意見交換の場として、留学生との簡単なディスカッションが出来たら……と思っています。

これまでの活動を通じて、留学生との交流・理解は深まってきていると思います。時には文化や習慣の違いから、小さな誤解を生じてしまうこともありました。しかし、お互いを理解し合おうとする気持ちを持って、理解を深めてきました。日本人も、私個人も、一人で生きているわけではありません。今後、今まで以上に国際交流は必然的なものとなり、より大切なものとなっていくと思います。私は、世界の中で生きているのだと、よく実感します。

我が麗澤大学では、キャンパスの中でも充分に国際交流・異文化を体験することができると思います。そんな恵まれた環境のなかで、今日もいろいろな国の言葉が飛び交い、国際交流が行われているキャンパスで、楽しく過ごしています。



毎年恒例の国際交流餅つき大会、
「おいしい」と餅を頬ばる留学生
(2002. 12. 11)

心のふるさと学級で「ムグンファコッチピオッスムニダ」という韓国の遊び
(日本の「だるまさんが ころんだ」)を教える留学生 (2002. 10. 12)

秋田ホームステイで夏まつりを体験
(2002. 8. 2～8. 5)

留学生歓迎懇親会で各国の民族衣装を披露
(2002. 4. 26)

高知のホームステイで受け入れ家族と
バーベキューパーティー (2002. 8. 3～8. 10)

国際化推進セミナーで高校生と交流
(2002. 10. 31～11. 1)

留学生に関連する行事と地域交流一覧（平成14年度）

主　催　者	行事の名称	実施時期	実　施　地	参加留学生数
麗澤大学　国際交流センター	留学生歓迎懇親会	2002.4.26	学内	約280名＊
	高知ホームステイプログラム	2002.8.3～8.10	高知県	5名
	秋田ホームステイプログラム	2002.8.2～8.5	秋田県	9名
		2002.8.10～8.25	秋田県	2名
	留学生1日バス旅行	2002.10.5	葛西臨海公園・浅草	64名＊
	国際交流餅つき大会	2002.12.11	学内	約500名＊
㈶モラロジー研究所	「伝統の日」感謝の集い記念式典アトラクション	2002.6.2	学内	1名
	生涯学習フェスタ	2002.10.6	学内	1名
	心のふるさと学級	2002.10.12	学内	7名
		2003.2.8		6名
流山市国際交流協会	ホームビジット	2002.5.25	流山市	22名
		2002.10.26		16名
柏市立柏高等学校	国際科授業	2002.6.7	柏市内	1名
		2002.9.27		1名
柏ユネスコ協会	少年団活動	2002.6.16	柏市内	2名
		2003.1.19		2名
柏市教育委員会	平成14年度第1回国際理解教育研究協議会	2002.6.25	柏市青少年センター	2名
柏市立光ヶ丘中学校	総合的な学習の時間	2002.7.18	柏市内	5名
きらく会	国際交流	2002.8.7	柏市内	3名
㈶北海道国際交流センター	第23回国際交流の集い	2002.8.19～9.1	北海道	13名
柏市立松葉中学校	第2学年総合学習	2002.10.2	柏市内	1名
国際化推進セミナー船橋ブロック事務局	千葉県高等学校生徒国際化推進セミナー第4回船橋ブロックセミナー	2002.10.31～11.1	県立手賀の丘少年自然の家	10名
沼南町国際交流協会	国際交流の集い	2002.11.10	県立手賀の丘少年自然の家	1名
	国際交流 in 沼南1泊ホームステイ	2002.8.10～8.11	沼南町	1名
千葉県立船橋東高等学校	異文化交流会	2002.11.26	船橋市	3名
柏市立第五小学校	国際交流学習	2002.10.18	柏市内	2名
		2002.10.25		
国立劇場業務課「留学生歌舞伎体験プログラム」事務局	留学生歌舞伎体験プログラム	2002.11.21	国立劇場	47名
留学生と日本人の友好と友情の輪を広げるつどい実行委員会	第17回・留学生と日本人のつどい「国際民族舞踊」フェスティバル	2002.11.24	東京・中野サンプラザ大ホール	2名
柏市立富勢西小学校	児童集会	2002.12.18	柏市内	3名
県立流山東高等学校	国際理解	2003.2.6～2.7	流山市	3名
㈶ちば国際コンベンションビューロー	ホリデーお雑煮交流お正月のホームビジット	2003.1.1～1.6内1泊2日	千葉県内	6名
からいも交流連絡協議会	からいも交流	2003.3.9～3.23	鹿児島県	20名

＊教職員、日本人学生も含む

〈温故知新〉

今は昔の物語
――草創期の麗澤教育――

名誉教授　池田　裕

常磐線「北小金」駅の東南方約一・五キロメートルにある通称「大勝山」山頂に、槌の音が響き出したのが昭和九年の秋頃のことである。当時の千葉県東葛飾郡小金町は、都塵にまみれない閑静な町であったとはいうものの、裏を返せばとんでもない田舎、いわば狐狸の住処と言っても過言ではないような田舎町であった。小金町の人々にとっては、この槌の響きは、黒船の黒煙にも劣らない大事件発生の警鐘に聞こえたことであろう。

当時の小金町の巷には、こんな会話が飛び交ったとか。

「何かあの山の上に建ち始めたらしいけど、ありゃー一体何が建ち始まったんだ？」

「何かわからんが、偉い学者先生様みたいな先生がお出でになって『ここに学校を創る』とか、おっしゃったそうな」

「ほんとか？　あんな山の中に学校を創ったって、生徒はどこから来るんだ」

「あの学校には、『寮』とかいうものがあって、日本全国から生徒を集めて、そこに寝泊りさせて勉強させる、そんな学校らしい」

「そんな学校に誰が入るんだ」

「それがね、『モラロジー』とかいうのがあって、そのメンバーの人達の学校らしいぞ」

「『モラロジー』ってなんだ？」

開塾のころ（昭和10年）— キャンパスの桜並木

「良くわからんけれど、それを実行すると幸福になれる学問だとさ」

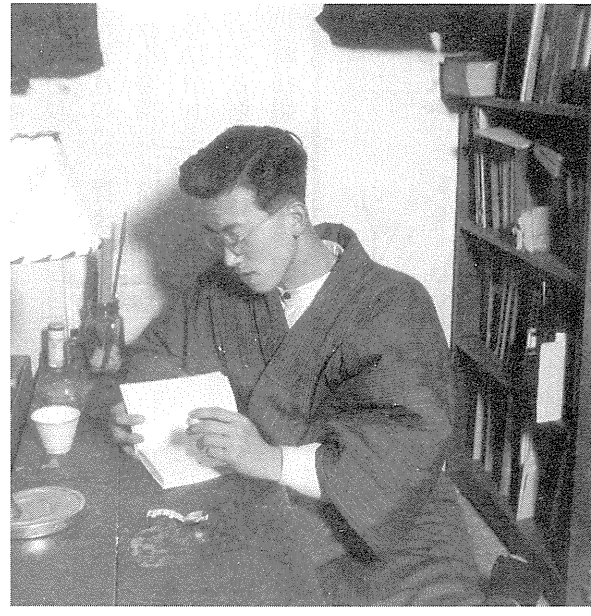
「なんだ、それは宗教じゃないか？」

「いや、宗教じゃない。『科学』なんだ。モラロジーのことを『道徳科学』とも言っているから、宗教じゃなくて科学なんだって」

と、巷では宗教説と科学説とが乱れ飛んだ。どちらが優勢であったかはわからない。ちなみに宗教説の人達には、こんな思惑があったのではなかろうか。

「あそこには『宇宙根本唯一の神霊』がお祀りしてある。すると宗教だ。宗教なら信者がいる。するとその信者たちが必ずお参りに来る。全国から、この北小金の本山を仰いでお参りに来るにちがいない。すると門前には市が建つ。北小金駅前にはみやげものを売る商店が建ち並ぶ。信者たちが泊る宿屋が軒を争う。今はさびれているこの北小金の駅前は、成田山のような繁華な門前町になるにちがいない」と。

こんな夢と希望が芽生えてきたのではなかろうか。まさに「とらぬ狸の皮算用」をしていたと推測できそうだ。



学生時代、寮で読書をする池田名誉教授

町の人々には「怪音」に聞こえた槌の音は、創立者には「快音」となって胸に響いた。それまで約一〇年間、『モラロジー』によって社会人教育（現在の生涯学習）を実践してきた廣池千九郎先生が、この秋ここで（昭和一〇年）、初めて学校教育に取り組んでいこうとされたのである。創立に当っての廣池千九郎先生は意気軒昂。その意気はまさに天を衝かんばかりの勢いであった。

その校名は『道徳科学専攻塾』と命名された。廣池千九郎先生が、どれほど張りきっておられたかは、その専攻塾の生徒募集要項を繙くとよくわかる。例えば、「日本語もしくは英語を解する外国人にして入塾を希望するものには、いずれの国人を論ぜず入学を許可し、日英いずれかの教科書を与えてこれを聴講せしむ」というのがある。

また、その「第二条、モラロジー専攻塾の特色」という項をみると、

(一) 全生徒を寄宿舎に収容して、日夜モラロジーにて人格を造り、安全この上なき事（注1）。

(二) 食費、舎費の安き事。これに対して食事おいしく、かつおやつまで出し、大浴場の快き事。

(三) 故に生徒は、何の費用もいらず、一カ月食費一五円、舎費五円、外に束脩三〇円（注2）、月謝一五円（中略）かくの如くにして、この外には一

厘の費用も要らずに大学の実質内容を有する最高学府を卒業するを得るなり。

(四) 全面積一〇余万坪みな松、杉の森林にて、学園この間に開かる。故に生徒の健康、体重みな増進し、中には一貫目以上も進みしものあり（注3）。

（注1）当時は、学生の間で左翼的思想に走り、いわゆる「アカ」という烙印を押される者がままあった。

（注2）「束脩」というのは、入門の時、先生に献ずる贈りもの。「脩」は干し肉。中国では入門の時にこれを束ねて献上した。これが現在の「入学金」に当る。食費、舎費を合わせて月額二〇円だが、当時の東京での下宿代（三食賄（まかな）いつきで一室四畳半ないし六畳）三〇円ないし三五円に比べるとかなり安い。ただ当時の「月謝」（授業料）は慶應・早稲田各大学が一三円余であった。なお東京大学は一二円。

（注3）この項は開塾して一年めのもの。一貫目とは三・七五キログラム。当時は体重が増えるということは健康のシンボルとされていた。

こんな具合に全国（といってもモラロジーの会員）に宣伝された。

また、本学園の環境は「英国にて森林地に存在する有名なるウェリントン・カレッジ（*Wellington・College*）の景勝と髣髴（ほうふつ）たる趣ありと称せらる」とある。なお現在のウェリントン・カレッジの様子を見たい方は、http://www.wellington-college.berks.sch.uk/ を検索されたらよろしい。

さて塾の授業が始まった。そのカリキュラムは、と見ると、ほとんどがモラロジーと英語に尽きる。当初、第一期の生徒であった上田茂男先生（後の麗澤大学教授・麗澤高等学校主事）の回想を御披露させていただく。

「今から思えば、昭和一〇年当時すでに男女共学であったこと。また語学教育の方法も、すでに時代の先端をいって、実用英語に重きを置いていたこと。また『経を以て経を説く』をモットーとして、わかってもわからなくても原書で勉強する方法が取られていたのは、確かに注目に値することと思われる。

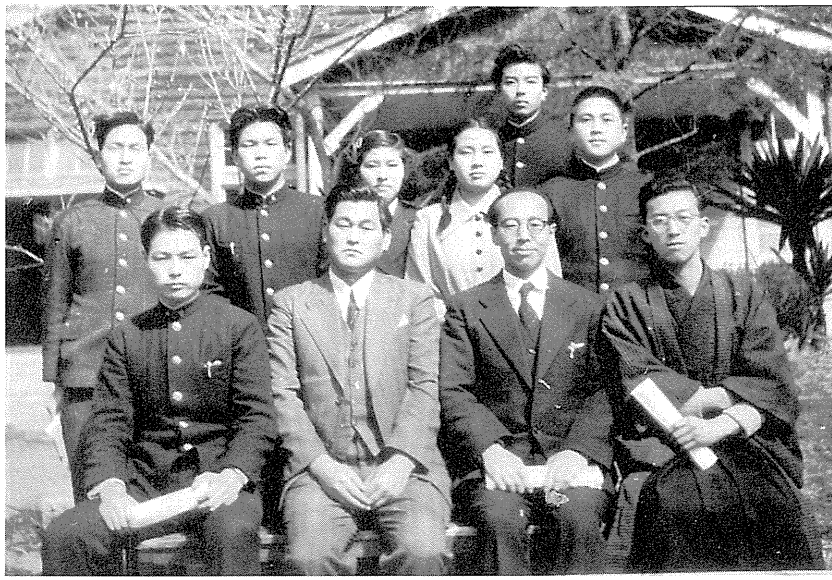
ところで、英語の先生であるが、最初は高橋武市先

本科第一学年時間割表

	月	火	水	木	金	土
1	松浦講師 英語 （メリディアン）	松浦講師 英語 （メリディアン）	松浦講師 英語 （メリディアン）	高橋講師 英語 （商業地理）	松浦講師 英語 （メリディアン）	松浦講師 英語 （メリディアン）
2	松浦講師 英語 （トークス）	松浦講師 英語 （トークス）	高橋講師 英語 （商業地理）	同	松浦講師 英語 （作文発音）	松浦講師 英語 （トークス）
3	宗講師 論文（2冊）	次長先生 特質 論文（1・3冊）	次長先生 特質 論文（1・3冊）	次長先生 特質 論文（1・3冊）	教監先生 論文（1冊）	宗講師 論文（2冊）
4	同	同	同	同	同	同
5	宗講師 英語 （センチュリー）	松浦講師 英語 （イソップ）	マッコイ 英語 （会話）	松浦講師 英語 （メリディアン）	宗講師 英語 （センチュリー）	松浦講師 英語 （作文発音）
6	同	松浦講師 英語 （イソップ）	同	松浦講師 英語 （トークス）	高橋講師 英語 （商業地理）	森　指導 簿記

生、松浦興祐先生、それにマッコイ先生という米人がおられた。しばらくして、当時、東京帝国大学大学院に在学中であった宗武志先生が来られた。宗先生は中目黒にあったお宅から毎日通われて、夜など遅くまで私たちの付き合いをして、それから夜一一時頃帰られるような有様であった。当時は全く師弟一体となって勉強を楽しんだのである。」（『廣池学園五〇年史』第一巻三一四～三一五ページ）

（注）次長先生＝廣池千英先生、教監先生＝廣池利三郎先生、宗講師＝宗武志先生（旧伯爵・貴族院議員）、松浦講師＝松浦興祐先生、高橋講師＝高橋武市先生（Ph.D）・森指導＝森善市先生、論文（2冊）＝廣池千九郎著『道徳科学の論文』、（2冊）とは「昭和九年刊行の第二版全六冊のうち、二冊目」という意味。特質＝廣池千九郎講述『新科学モラロヂー及び最高道徳の特質』（初版、昭和五年）



麗澤13期生の卒業式終了後、英語会話同好会のメンバーと
（前列右端が池田名誉教授・昭和25年３月）

このカリキュラムで、この教授陣から教えを受けた生徒の中の一人の話。

塾生たちが入学してまもなくのことである。日光へ遠足に出かけた。そこには大勢の観光客がいた。その中に欧米から来たのではないか、と思われる一グループがいた。そのグループの一人に、わがモラロジー専攻塾の生徒が、つかつかと歩み寄り、塾仕込みの流暢な英語で話しかけた。その外国人にしてみれば、日本人からいきなり英語で話しかけられたので、驚いたであろう。二人はしばらく談笑し合っていた。やがて別れるに当って、件（くだん）の生徒に「汝は、いかなる大学のプロフェッサーなりや」と尋ねたそうだ。

その生徒の名前は佐藤 弘さんと申し上げる。以上が麗澤教育・温故知新の「温故」の一幕である。おあとがよろしいようなので、「知新」の方に、ここいらでバトン・タッチする。

〈麗大の今〉①

いのちを見つめて

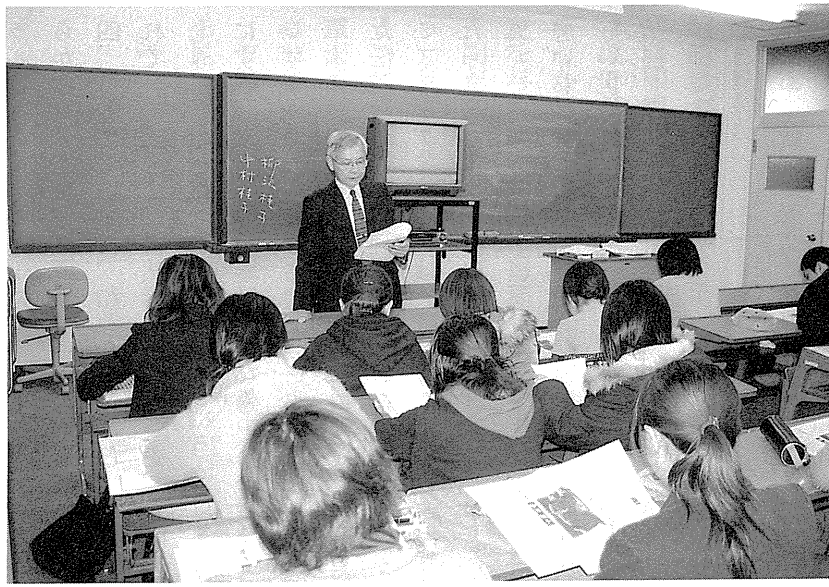
――「道徳科学の授業」欠端クラス断章――

外国語学部教授　欠端　實

一、明治以降の日本の歴史は、ヨーロッパに追いつこうとして懸命に走りつづけた歴史であった。「進化」の思想に接し、人々は、目指すべき方向はただ一つだと思い込んでしまった。本学の創立者廣池千九郎は言う。「今日、わが国の形勢たるや世界の後進国として、先進国に駢馳(べんち)せんとするの希望を有するの時代なれば、学校の教授のごときも、つとめて、時間と労力とを節して、無用の学をしりぞけ、有用の学をすすめ、駟馬(しば)にむちうち、八駿(はっしゅん)を駆り、叱咤(しった)急進せざるべからず」(『日本文法てにをはの研究』)と。「四頭だて馬車の馬に鞭をあて、八頭だて馬車の馬を駆りたてて叱咤急進」し、そして唯一「普遍性」あるヨーロッパ的価値実現のために、ひたすら「はやく、はやく」とばかりに走り続けたのである。第二次大戦後もアメリカにならって、再び走り続けた。今や二一世紀、反省の時である。

二、今日の生命科学はわれわれに教えている。いのちあるものは共通の祖先をもち、四〇億年という時間をかけて、多様ないのちの形をつくってきたことを。

いのちあるものは全てつなげられてきた。「あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたがひの、きやうだいなのだから」(宮沢賢治)。「兄弟」なるがゆえに他のいのちの犠



道徳科学（欠端クラス）の授業風景

牲が不可欠である。個々のいのちは、何れも四〇億年の歴史を背負いながら、互いにいのちのやり取りをしている。これ以外に生きていく方法はない。

いのちのつながりは目には見えないが、つながっている事実、つなげられている事実は、しっかりとみつめなくてはなるまい。多様な個々のいのちは、個性的、有限的な存在。そして無限とも思える大自然のはたらきの中で、どこまでもどこまでもつなぎあわされていく。その事実をどのように感得できるのか。

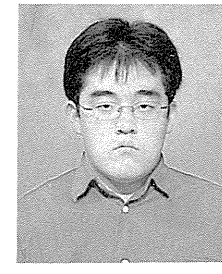
三、いのちの起源も行く末も不明である。しかし、いのちとはどうやら与えられたもののようである。自分のいのちとは言え、自分自身でコントロールできない部分があまりにも多い。日本では古来「賜りたる御いのち」としてうけとめてきた伝統がある。今日、「いのちの私物化」（高　史明）の風潮に覆われているけれども、いのちが頂いたものとしての側面をもっていることは否定できない。いのちを頂いたことに無限の感謝をささげたいと思う。それがモ

ラル実行のエネルギーになったとき、絶えざるやわらかなエネルギーが湧きつづけるであろう。

四、日本においては、和歌や俳句などに端的に示されているように、自然界の森羅万象を、人間と交流しうるものとみなしてきた。「花にうぐひす、みづにすむかはずのこゑきけば、いきとしいけるもの、いずれかうたをよまざりける」(紀貫之)。人間は、草木の声をきくことのできる存在であった。こうした伝統は今日まで続いている。自然を見つめるアニミスティクな眼差しは、目にはみえない大自然のはたらきをも見据えている。

五、ハベル大統領の言葉。「人間の根源的な体験を思いおこし、新たに表現しなおし、その霊感を、新しい世界秩序の創造の中に吹き込み、われわれがみな個々の文化的独自性を放棄せずに(多様な文化が多様なままに)、ともに平和に暮らせるようにすることが必要である」。そのためにも、今、いのちをみつめる教育が大切であると思う。

ドイツ語学科一年　濱野　泰裕



僕が、数ある道徳科学の講義の中で欠端先生の講義を取った理由は、「いのちを見つめる」という題目に何か根源的な物を感じ取ったからです。

欠端先生の講義は、人間の自我、自然との関わり、アニミズムや宗教—神との関係など、色々なテーマで授業を進め、その都度、学者、詩人、作家など色々な分野の人の話をプリントにして読んだり、ビデオで見たりして、その中で人間や自然が行ってきた事、それと一緒に生じた問題について考え、思った事を感想文にして提出する、という形態をとっています。

そして、僕がこれまでの一連の授業の中で一番興味を持ったのは、人間と自然の関わりではないかと思います。しかし、近代、そして現代の経済

や産業に代表されるようなものは、ある面において自然を食いつぶす事で発展・成長してきました。でも、やはり自然界―地球にも限界があります。この問題については、講義の中で見た一本のビデオの言葉が印象的でした。それはレイチェル・カーソンの言葉で、「この地球の長い歴史の中で、何万年足らずしか過ごしていない人間が、自然に深刻なダメージを与えているが、自然はそんなにやわではなく、人間が滅んだあとに、長い時間をかけ再生するだろう」といった意味だったと思います。僕も、人間にとって自然は絶対に必要なものだけど、自然にとって必ずしも人間が必要なものではないんだなと思わされました。

欠端先生のこの講義は、自分達の社会のこれからを見つめるよい講義だと思います。

中国語学科一年　中島　亜希子

この授業では、毎回、先生が生命や環境問題などのテーマを取り上げてプリントで解説をし、そのテーマについてのビデオを見て、自分の感想を書いて提出する。

私がこれまで見た中で一番印象に残っているものは、全身マヒの状態になってしまった人が、家族に「生きたい」と自分の意志を機械を通して伝えたビデオである。このビデオは、私に「生きる」とはなにかということを考えさせた。

今まで、機械につながれて生かされているなら、生きている意味がないと思っていた。しかし、このビデオを見て、その考えは変わった。彼は、誰よりも「生きたい」という強い意志をもっていた。そう思えるようになるまでには、たくさんの苦しみを経験し、何度も死にたいと思っただろう。彼を「生き

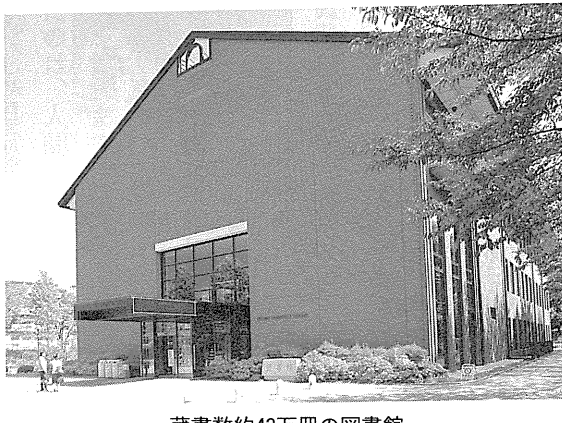
たい」と思わせたものは、いったいなんだったのだろうか。また、彼にとって「生きる」とはなんなのだろうか。

彼の一番の支えになっていたのは家族だ。家族も彼と同様、毎日辛い日々を送っていただろう。しかし、手厚い看護で彼を励まし続け、苦しみを分かち合った。家族の愛があったからこそ、彼は「生きたい」と思えるようになったのだと思う。家族は彼にとって本当に大きな存在だったろう。

彼は今、自分の意志で生きている。機械を止めてしまえば彼はいつでも死ぬことができる。しかし、彼は毎日必死で生きている。健康である私たちよりも生きていることを幸せに思い、毎日を過ごしているかもしれない。彼にとって「生きる」とは「生きたいから生きる」、ただそれだけのことだと思う。理由など必要ないのだ。

この授業を受けて、私は幅広い考えや、物事をいろいろな側面から見ることができるようになったと思う。また命について真剣に考えるようになった。

これからも、自分の考えを深め、広い視野をもった人間になっていきたい。



蔵書数約43万冊の図書館

〈麗大の今〉②

図書館の風景

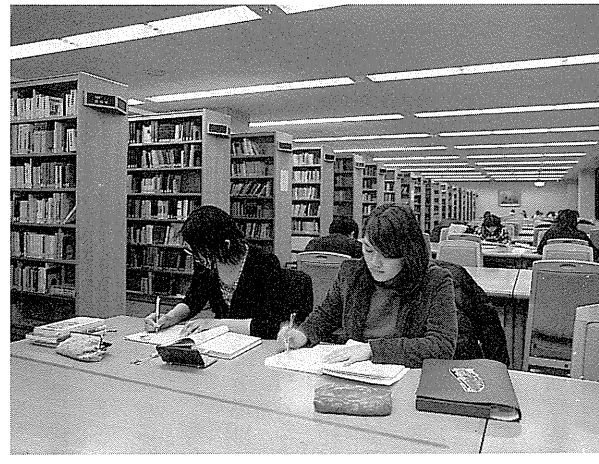
――麗大生の素顔に接して――

図書館職員（レファレンス担当）　友永　由美子

吹き抜けの明るいラウンジ、採光のよい大きな窓、ゆったりした机と椅子のある閲覧室。そして、利用者が自由に本を取り出すことができる開架式書架。ビデオやCDを、見たり聴いたりできるAVルーム。窓の外に目をやると、桜やケヤキが季節、季節にいろんな顔をみせてくれます。立派な大学図書館はたくさんありますが、こんなにゆったりと温かな感じのする図書館はそうありません。新図書館がオープンして一〇年余り。図書館の利用者もずいぶんと増えました。図書館が学生生活の大切な場所となっていることは、大変うれしいことです。

春

キャンパスが桜色にかすむ四月。新入生を迎えると、図書館も新たな一年が始まります。一連の入学行事がすむころになると、寮や学部の上級生達が新入生をつれて、図書館のガイダンスにやってきます。IDカードを使った入館システムの説明や、パソコンで資料を検索して本を探す手順などを教えたりしています。毎年行われる麗大ならではの、ほほえましい光景です。日本語もたどたどしく、ちょっと不安げな留学生たち。資料の検索や貸し出しルールを覚えるのに、少し時間がかかります。「かりる」と



図書館でレポート作成に励む学生

「かえす」、「延長」と「延滞」、これらはカウンターで留学生が混乱する、なんともややこしい日本語です。

留学生は日本語の語彙や文法を調べるのにも、ずいぶんと苦労しています。「です、と　だ、の違いは？」「これ！やめなさい、の、これって何？」やさしく説明してある「外国人のための基本語辞典」や「語源辞典」「文法辞典」などで一緒に探しながら、日本語の辞書の種類や使い方を説明していきます。一つの側面だけでなく、納得するまで追究する彼らの姿勢に感心します。私も、普段なにげなく使っている日本語のあいまいさや揺れを、再認識させられます。

夏

雨に煙るけやきの木立のみどりが爽やかです。七月。期末試験を控えて、学生の図書館利用が最も多い月です。一階、参考図書コーナーの返却テーブルには、日中韓英独仏西伊など、驚くほどさまざまな言語の辞書が山と積まれています。レポートの締め切りが近づいた学生たちが、入れ替わり立ち替わり、カウンターを訪れ、いろいろなテーマの本を探していきます。一冊の本に何人もの予約がつくこともしばしばです。課題関連の図書がすっかり出払ってか

ら、のんびりとやってくる学生もいます。「国際結婚についての本を探しているんですけど。貸し出し中みたいで」「レポートの締め切りはあさってなんです」。雑誌と新聞から探すことにしました。キーワードは「国際結婚」。雑誌記事の索引データベースで当館にある雑誌を数点探し出し、新聞記事もCD－ROMで見つけました。「これでなんとかなるかな。今度はもうちょっと、早めにね」、「はい」。のんびりやさんは帰っていきました。インターネットなどからの情報を元に、安易にレポートをまとめてしまう学生もいると聞きます。まじめに資料を探しに来る学生には、求める資料を常に提供したいと思っています。

秋

碧空（あおぞら）がどこまでも続く、一〇月のすがすがしい朝です。

二年生のN君が、見慣れぬ学生O君をつれてやってきました。

「図書館ではなんでも調べられるんだそうですね？」「そうね、まー」「兄貴の病気についてちょっと」「医学大辞典があるけれど、これは専門的すぎるから、家庭医学事典をみてみたら」。巻末のインデックスから検索すること、病気によっては本もあるから、OPAC（Online Public Access Catalog）で調べてみるようにいうと、O君はぼさぼさ頭をちょこんとさげて、閲覧机の方に行きました。

しばらくしたある日、O君がひとりでやってきました。「こんにちは。この前はどうも」「きょうは？」「すこし本でもみてみようかなと思って」「わからないことあったら、どうぞね」わたくしの頬もちょっとゆるみました。「燈火親しむ候」「読書の秋」死語となりつつある言葉ですが、授業や研究のため以外の読書の時間を彼らがどれだけもっているか、気になるところです。「元気がでる本は？」「大学生が読んだらいい本は？」などと聞いてくる学生もいます。特定の本を紹介するのではなく、そのような本が並

んでいる場所を二、三教えるようにしています。彼らが今、欲しているものを選んでくれたらと思います。ちょっとした会話から、読書に目をむけてくれる学生もいます。読書の楽しみを知ったら、次に薦めるのは古典です。人類の遺産でもある世界の名著にも触れて欲しいと思うのですが、最近のベストセラーは予約、予約の人気でも、こちらはなかなかそうはいきません。

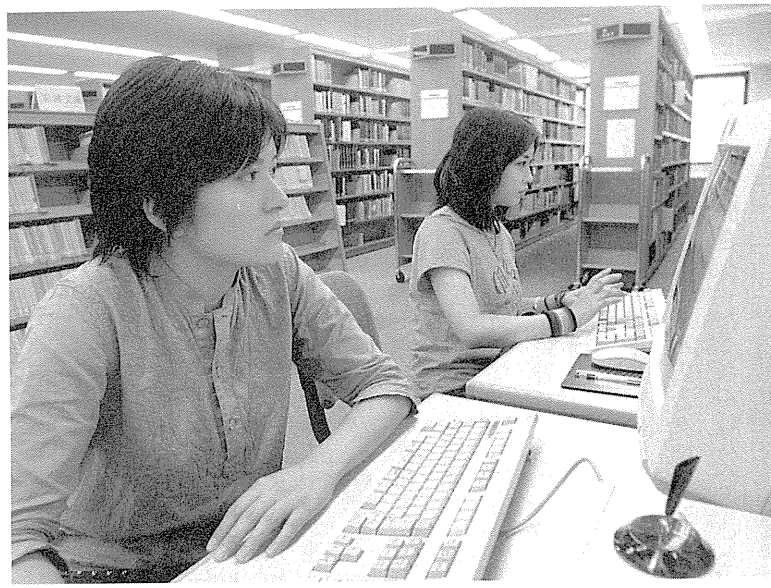
冬

「返却です!」カバンから出された本が冷え切っています。もうすぐクリスマス。外は木枯らしです。卒論や修論の締め切りがせまっています。

資料集めから始まって、やっと、最終段階にこぎつけた彼らは、論文の記述もれや統計資料の典拠のチェックに余念がありません。引用した資料の書誌事項を控えておくのを忘れたと駆け込んでくる学生も結構います。現在、図書館の蔵書は四二万冊、学部生が論文を書くためには、かなりの部分をカバーできるようになりましたが、資料がみつからないと嘆く学生もいます。検索する際にキーワードを固定してしまうためです。例えば「少子化問題」では「出生率」「結婚」「人口問題」など関連のことばを連想ゲームのように探していくと、意外にたくさんの資料がみつかります。「柔らか頭になろうね」などといいながら、カウンターで学生と言葉探しをしたりします。

修論や博論を書く院生にとっては、資料はいくらあっても足りません。学外からの図書貸借や文献複写などのインターライブラリーローンを一番利用するのは、大学院生です。「今、提出してきました」とわざわざ報告にきてくれる学生たちのうれしそうな顔をみると、私もほっとします。

カウンターで、本の貸し出し返却などのやりとりをしていますと、今もむかしも変わらない麗大生のすてきな素顔に出会います。借りる本を、図書館員



パソコンで書籍を検索する学生

が手続きしやすいように、バーコードの貼ってある面を上にして並べてくれる学生。ＩＤカードを両手でていねいに差し出す学生。借りた本にカバーをつけて読んでくれる学生。すみません。ありがとうございましたと本を受け取り、本を手渡す学生たち。入学当初、緊張していた留学生も、半年も経つと、あいさつも板について、すっかり、麗大生です。本もよく利用してくれます。

ともあれ、こういう日々が続くと和やかな図書館なのですが、なかなかそうとばかりはいきません。少数ですが、雑誌や辞書の無断持ち出し、長期延滞など、気になることもあります。また、通路や階段でのおしゃべり、携帯電話のベルなども、悩みの種です。

毎日日課のように図書館を訪れる学生もいますが、一度も図書館を利用することなく卒業していく学生もいるでしょう。図書館を訪れ、自己と向き合い、ひたすら勉強や読書にいそしむ、かけがえのない時間。そこで、彼らの生き方を決定づけるような一冊の本に出会うことを願わずにはいられません。

〈麗大の今〉③

女だからできる、女にしかできないこともある!!

――麗陵祭を通じて学んだこと――

学友会麗陵祭実行委員会委員長
国際経営学科三年　鴫原（しぎはら）亜紀

「きらり☆～輝け!!一番星～」このテーマを掲げ第三九回麗陵祭は平成一四年一一月二日・三日・四日に開催されました。今年は三日間とも晴天に恵まれ、一一、一〇〇人というたくさんの方々が足を運んでくださり、大変な盛り上がりを見せてくれました。一日が終わるたびに気になっていた来場者数も、三日目の夕方には一万人を突破し、心から喜んでいたことを思い出します。

三年間の麗陵祭実行委員としての活動を終え、今の自分があるのは、たくさんの方々に出会い、たくさんの物事を見聞きし、たくさん触れ合うことができたからだと思います。第三九回麗陵祭が晴天の下、無事に終わることができたのは、来場者の方々、参加団体の方々、各部署の方々、各業者・協賛店の方々、教職員の方々、麗陵祭に携わった方々、そして、麗陵祭実行委員会のOB・OGの方々、本当にここには書ききれないくらいの人たちの協力のお陰です。

さて、この麗陵祭を造り上げるため、私たちは一月から一一月まで約一〇カ月間、活動をしてきました。古いメンバーから新しいメンバーに変わり、何もかもが新しいことだらけで不安な気持ちだったことが、懐かしく感じます。私達、麗陵祭実行委員会は、会社のように、本部・企画局・広報局・装飾局・総務局・文化講演局の六つの部署に分かれて活動を

しています。私は、三年間本部で活動をしてきました。一年生の時はとにかく先輩をよく見てがむしゃらに動き回り、二年生の時は本部会計として一つの重要なポジションを任され、それに没頭していました。

そして、三年生になり委員長になった時、今までとは全く違う視点から見ていかなくてはならないという事と、三九人目にして初めての女性委員長であるということのプレッシャーを感じました。しかし、活動をしていく中で大きな壁にぶつかった時、必ず思い出してしまう「女だから」という気持ちは、夏休みを境にいつしか消えていったように思えます。「男だから、女だから」という言葉より、「女だからできる、女にしかできないこともある」と思い始めてから、初めての女性委員長という重い看板が、軽い看板に変えられたのかもしれません。

私は委員長になった時、これだけは忘れてはならないと思う事が三つ程ありました。一つ目は、私自身も麗陵祭実行委員会の一員であるということ。二つ目は、相手は一人の人間であり、そして自分も一人の人間であるということ。そして三つ目は、私たちにしかできないことを最大限に生かした麗陵祭を造り上げること。その三つを、麗陵祭が終わった今、本当にできていたかどうかは未知ですが、この三つの言葉は私の中での呪文のようでした。

上に立てば立つほど、そのポジションに胡座(あぐら)をかく事があるけれども、一実行委員として何をすべきか。委員長だからというよりも、二年多く麗陵祭を経験しているだけで、やるべきことは同じだと思います。私はとにかく視野を広げ、目を配ることで、局員のみんなとたくさん話をしようとしていました。本来、委員長というと「ただ指示を出し、偉そうに座っているだけ」というイメージがありますが、自分が一年生、二年生の時の委員長を思い出すと、一緒に考えたり、やってくれたりする事で「委員長って私たち局員にも声をかけてくれるんだ」と私自身が嬉しく、感動したことがあるからです。あとは、人間なんだから失敗はつきものだということ。最初から失敗せずにできる人間なんていないのだから。

失敗して次に成功したら、その次はもっともっと大きくなれるということです。

そして、三つ目の私達にしかできない麗陵祭。これは、どの代の委員長も思い描くことなのかもしれません。新しいメンバーで描いた夢のような麗陵祭。しかし、日を追うごとに現実と理想の幅を思い知らされました。しかし、私ができることは、局員のみんなが思う理想に近づけるために何をしたら良いのかということ。前期までは何もできない自分に苛立ちを感じていましたが、夏休み以降、委員長というものが何をすべきかわかったように思えます。今年の麗陵祭を思い返すと、反省点はいくつも挙げられます。事前に防げたこともたくさんあると思います。しかし、それもまた今年の麗陵祭の特徴の一部であると私は思います。

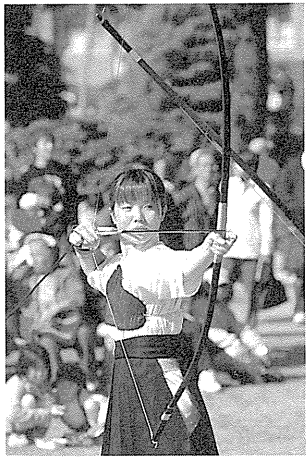
一つの「麗陵祭」という大きな目標を達成した今、この麗陵祭実行委員会としての活動の三年間は、本当に学ぶことだらけで驚きました。一年生のときに感じた「大学祭」という、見たことのないくらい規模の大きなこと。二年生になり、色々な人と話すことで感じた人間関係の難しさ。そして三年生では社会の広さと常識の重さを感じました。時に「私は学生なんだろうか」と疑問を感じ、悩んだ日々もありました。しかし、こんなにも貴重な体験は二度とできないことだろうと思います。

来年は四〇回という節目の年でもあります。今後どれくらい麗陵祭が発展していくかは、今の私には予想はできません。それくらい何もかもがハイスピードで進化しているからです。今年のテーマである「きらり☆〜輝け!!一番星〜」という言葉と同じように、日本の中で一つしかない麗澤大学…そして麗陵祭。日本の中で一番とか、千葉県の中で一番とか、そんな事ではなく、フィナーレの時の大きな大きな花火のように「麗陵祭」という日本中でたった一つしかない花を咲かせて欲しいと思います。そして、四〇回を皮切りに、またたくさんのかけがえのないものを、築き上げていって欲しいと思います。

展示コーナーを見て回る来賓の本多柏市長（中央）と廣池学長（左）

開会の挨拶をする鴫原委員長

台湾からの留学生による出店



弓道部の演武

オープニングセレモニーで演奏するサニーゲイツ

〈麗大の今〉④

麗陵祭出展報告
「好きな言葉」の調査

国際経済学部 平成一四年度 丸山康則ゼミ一同

好きな言葉

多くの人は、それぞれ自分が好きだという言葉を持っています。格言、ことわざ、金言、といった社会でも広く知られている言葉もありますし、自分だけが大切にしているものもあります。モラロジーの学祖廣池千九郎先生の格言集もあります。

今年の麗陵祭には「好きな言葉」を調査して、その結果を発表することにしました。

調査の対象

子供はどうなのか。早速、光ヶ丘小学校へ行きました。教頭先生は「面白いですね。協力します。でも、一年生など低学年はムリですね」ということで、四年生・五年生・六年生を対象に調査。中学・高校は、柏の麗澤中学・高校と麗澤瑞浪中学・高校にお願いしました。大学生は麗澤大学の学生、大人は学生諸君のご両親や祖父母の皆様、アルバイト先の方々などとなりました。

光ヶ丘小―一〇二名、麗澤中学・高校、麗澤瑞浪中学・高校―三七三名、麗澤大学―三七四名、大人―四〇名、合計で八八九名の方々のご協力をいただきました。

麗陵祭での展示発表。丸山教授（左から２番目）とゼミ生たち（2002. 11. 3）

調査の内容

小学生、中学生、高校生、成人には、次のことを調査しました。

・あなたの好きな言葉はどんな言葉ですか？
・その言葉を思うと、どんな気持ちになりますか？
・その言葉は誰から聞きましたか？

大学生には、この三つの質問に、更に次の質問を加えました。

・廣池千九郎先生の言葉一五のうち、好きなもの三つ、およびそこから受ける気持
・相田みつをさんの言葉一四のうち、好きなもの三つ、およびそこから受ける気持
・モリスの「一三の生き方」のうち、一番好きな生き方、およびそこから受ける気持

調査の結果

小学生

①順位―一位「努力」、二位「がんばれ」、三位「がんばる」、「あきらめない」、五位「希望」

②受ける気持―「元気になる」「勇気が出る」「がんばろうと思う」

③誰から―「本」「父」「母」「テレビ」「小学校の先生」の順です。

中学生・高校生

①順位―一位「途中困難最後必勝」、二位「ありがとう」、三位「成せば成る」、四位「一期一会」、五位「継続は力なり」

②受ける気持―「元気」「勇気」「がんばろう」ですが、これに続いて「新しい見方・考え方」「何か刺激を求める」が少し増えてきます。

③誰から―「本」「中学の先生」「友人」が多く、中でも「本」が断然トップ。

大学生

①順位―一位「一期一会」、二位「明日は明日の風が吹く」、三位「成せば成る」、四位「ありがとう」、五位「有言実行」

②受ける気持―「勇気」「がんばろう」と「元気」に並んで、「何か刺激を求める」「新しい見方・考え方が生まれる」が伸びてきています。小学校では「元気」「勇気」、大学では「元気」「勇気」を土台にして「新しい見方・考え方」へと発展してきています。

成人

①順位―一位「一期一会」、二位「継続は力なり」、三位「ありがとう」、四位「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」

②受ける気持―「勇気」「がんばろう」に次いで、「考えが深くなる」「新しい見方・考え方」が高くなっています。「新しい刺激」は低下しています。

③誰から―圧倒的に「本」です。

考えもますます深く、人生が織り成す苦楽の複雑な模様が、好きな言葉に表れています。味わい深きもの人生、といったところです。

廣池千九郎先生の言葉

①順位―一位「途中困難最後必勝」、二位「徳を尚ぶこと学知金権より大なり」、三位「率先善を認め勇を鼓してこれを貫く」

②受ける気持―一位の言葉からは「勇気」、二位

の言葉からは「何か刺激を求める」、三位の言葉からは「勇気」を受けている。

相田みつをさんの言葉

①順位―一位「しあわせは　いつもじぶんの　こころがきめる」、二位「つまずいたっていいじゃないか　にんげんだもの」、三位「あなたにめぐりあえて　ほんとうによかった　ひとりでもいい　こころから　そういってくれる　ひとがあれば」

②受ける気持―一位からは「勇気」「優しくなる」、二位からは「元気」「勇気」、三位からは「優しくなる」「元気」「慰められる」

モリスの一三の生き方

①順位―一位「柔軟な多元主義」、二位「愛情と共感」、三位「集団活動・積極活動」

②受ける気持―一位からは「元気」「勇気」「新しい見方・考え方」「考えが深くなる」、二位からは「優しくなる」、三位からは「元気」「動き出したくなる」

来室された方々の感想

「言葉の深さがわかった。やさしく説明してくれた」

「一見シンプルなようで、とても『深い』テーマだと思いました」

「どの言葉もその人の気持が滲み出ていて良かったです。人に対して素敵な一言を言えるようになりたいです」

「たった一言の言葉で、勇気づけられることがあるので、言葉はすごい力を持っているのだなと思いました」

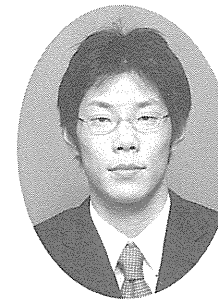
「好きな言葉、勇気づけられる言葉、……う～んなるほど。人は、いろいろな人に出会い、言葉に励まされて、みんな生きている。言葉はすばらしい。有難うございました」

〈麗大の今〉⑤

逃げずに立ち向かえ!!

――剣道部の活動を通じて学んだこと――

剣道部主将
国際経済学科四年　伊藤洋平



私達、麗澤大学剣道部は、堀ノ内勇吉先生（範士八段）、森　克昭先生（錬士七段）、武澤保美先生（六段）のご指導の下、日々稽古に励んでいます。

私は剣道部に入部し、日々稽古を重ねてきて、主将という立場を任された時、卒業された先輩方に恥じないような部にしようと心に決めました。しかし、いざ主将になって感じた事は、今までは先輩の言う通りにしているだけでしたが、主将という立場になると、部員全員をまとめて行かなければなりません。稽古の内容や、組み立て、合宿から休日まで、全て最終的には私自身が決めなければなりませんでした。

日々稽古をしていくということは、目標とする試合があり、試合に出場するならば一つでも多く勝ちたいという気持ちがあります。試合で勝つには、相手よりも稽古をしなければなりません。しかし、部員の中には、授業やゼミ、アルバイトに忙しい人が多く、徐々に稽古に部員が揃わなくなってしまいました。私はいかに主将という立場でも、部員の授業出席やプライベートな時間の使い方を制限することは出来ないと思い、どうにか皆が剣道部を中心とした生活を、と考えましたが、結局良い考えは見つかりませんでした。剣道部という団体のリーダーがこれほどまでに大変で、また人をまとめる事がいかに難しいかという事を、改めて実感し、歴代主将の先

輩方の御苦労を初めて知りました。

そんなある日、稽古終了後に監督の森先生に呼ばれ、話をしました。先生は私に「最近、お前は逃げていないか。物事から逃げては駄目だ。今ここでやっている事が将来必ず役に立つ。卒業するまで、残りの剣道部の生活に全てを賭けろ」と話されました。その時、私は先生の言葉が、私の心を見透かしているのだと思いました。確かに逃げていたのかも知れません。私は、半分諦めたような気持ちで稽古をしていました。後輩達と先生方の間に挟まれ、いつになれば皆が気がついて、もっと稽古をしてくれるのかと。

だが、それは間違いでした。私が四年間の剣道部の活動を通じ得たことは、待っていても人は動いてはくれないということです。自分が率先して先頭に立ち、良い見本とならなければ人は動かないし、変わりもしないということです。

平成一四年、関東学生剣道連盟が創立五〇周年を迎え、三月一六日から一八日まで、その記念行事として「国際学生剣道セミナー」が開催され、私と副主将の宮本温司君（国際経営学科三年）は麗澤大学剣道部の代表として参加させていただきました。戦後の、剣道がまったくできない状況から出発して半世紀、その間の剣道をとりまく事情の変化を象徴する、記念行事としてふさわしいイベントでした。

このセミナーは海外の剣士二〇名、留学生七名を招待し、日本側は関東学連加盟大学八三校から一六七名が参加し、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、二泊三日の日程で開催されました。

おおまかなスケジュールを紹介すると、まず初日の一六日、午前中に戸田忠男先生（慶応大学）の講演、午後から佐藤成明先生（筑波大学）の指導による日本剣道形の稽古、さらに網代忠宏先生（東海大学）の指導による基本実技及び稽古。翌一七日は、午前中に国際シンポジウム、午後からは安藤宏三先生（早稲田大学）が講師をつとめ、審判法の理論講習と実技、そして稽古となりました。最終日の一八日には交流試合が行われ、夜には記念式典と銘打っ

たパーティーが盛大に開かれました。ちなみに、両日とも、七時から朝稽古があり、もちろん私も汗を流しました。

私は初めて外国人の剣士の方と知り合い、また共に稽古ができ、自分にとって剣道を通して国際交流ができたことは、世界を身近に感じられた貴重な経験となりました。またシンポジウムでは、外国人の方々の剣道に対する熱意が強く伝わってきました。特に心に残ったことは、外国人剣士の方が剣道をスポーツではなく武道であると認識していることでした。私は今まで競技として剣道をしている部分があったので、武道としての剣道ということに気づかされました。

また、オリンピックへの参加問題では、多くの外国人の方が反対の意見を述べられていました。私はその問題についてはあまり深く考えておらず、剣道が世界に広められるからいいのではないかということで、参加には賛成でした。しかし稽古の意味を改めて考えてみると、オリンピック競技となることで、明らかに今後は、試合で勝つことばかりを追求する剣道に傾いてしまうと思いました。決して反対とは言えませんが、剣道のオリンピック参入には、まだまだ議論が必要であると感じました。このような問題に積極的に意見を言える外国人の方々は、普段剣道に関わりながら、様々な面で困難がある中、稽古しているからこそ、剣道についてさらに理解をしようとしていて、これからの剣道を考えているのだと思いました。

また、言葉のことですが、日本人のような口調で話される外国人の方を見て、少し自分が情けなく思えました。やはり言葉も話せて、そして剣も交えることによって、本当の「交流」といえるのではと感じました。

日頃から私は、何不自由なく普通に稽古ができる状態に慣れてしまっていて、深く剣道について考えたことがなかったのです。あの春のセミナーを機会に、改めて剣道について考えてみる必要があると思いました。これから剣道を続けるにあたっても、稽古の本当の意味、自分にとっての剣道観をしっかり持って稽古に臨みたいです。

私達人間は、厳しい上り坂の道と、楽で平坦な下り坂の道があったとしたら、大半は楽な道に行くと思います。しかし、麗大剣道部は、厳しい上り坂を上って行かなければなりません。楽な道に行くことは、誰にでも出来るのです。

平成13年９月　第50回記念関東学生剣道大会終了後、麗澤大学剣道部のメンバーとともに（後列左から３番目が伊藤さん）

今が、今日が分岐点だと思います。こんな私達を見放さずに、御指導してくださる先生方を誇りに思い、部員一丸となって良き道を歩んで行きたいと思います。素晴らしい先生・先輩方に恵まれ、充実した環境で剣道が出来ることを改めて感謝しています。

優秀な実績を持った後輩や、頼もしい新入生も入って来ました。選手は揃いました。後は結果を出す事です。出来なくはないはずです。やれば出来る学生が剣道部です。先生や後輩たちと、意見の食い違いや衝突もあります。うまくまとまらなくて、迷惑を掛けてしまう時もありますが、三年生達を中心に、ずいぶん助けられています。

各種大会に向けて、日々の稽古はもちろん、春、夏の合宿などに、逃げずに立ち向かって行く覚悟です。先生方の教えを素直に受け止め、実行し、一つでも多く勝ち、良い「結果」を目指して行きます。最後になりますが、皆様の温かい応援を、よろしくお願い致します。

編集後記

◆第九号は〈特別寄稿〉・〈オピニオン〉・〈特集〉・〈温故知新〉・〈麗大の今〉という五つの柱で編集しました。ご執筆くださいましたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。◆〈特集〉「外国人から見た麗澤大学―ここがヘンだよ麗大生!!」では、大勢の留学生や外国人教員の皆さまから、温かくかつ鋭いご指摘をたくさん頂きました。（Y・S）

◇今回の特集に寄せられた外国人留学生や先生方の原稿を読ませていただき、「麗澤大学も捨てたもんじゃない」と嬉しく思いました。少し耳が痛くなるような指摘もありますが、それらも含めてキャンパスの「内なる国際化」が結構進んでいると感じたからです。私たちの身近に存在する異文化体験についての本音トークが、このような誌面の上だけでなく、キャンパス内のあちこちで日常的に交わされるよう、その一層の活性化を図っていきたいものです。（C・N）

◆本誌の編集委員会は左記のとおりです。戸田昌幸委員に代わって朴勇俊委員が、鈴木敦子広報課員に代わって鈴木麻衣子広報課員が、新たに加わりました。◆ご感想やご提言などがございましたら、麗澤大学広報課まで、お寄せください。お待ちしております。（S・T）

麗澤教育編集委員会（平成一四年度）
委員長・鈴木康之（外国語学部）
委員（外国語学部）・黒須里美、朴　勇俊
委員（国際経済学部）・中野千秋、堀内一史
事務局（広報課）・鳥潟貞幸、米田隆彦、鈴木麻衣子

『麗澤教育』第九号
二〇〇三年四月一日　発行
編　集　麗澤教育編集委員会
発　行　麗　澤　大　学
〒二七七―八六八六
千葉県柏市光ケ丘二―一―一
電話　〇四―七一七三―三〇三〇
印刷所　昌美印刷株式会社
表　紙　株式会社エヌ・ワイ・ピー